

平成 29 年度  
海洋教育 教員研修プログラム  
成果報告書

2018（平成 30）年 2 月





# 目次

プログラム実施概要	2
1. 小学校	5
(掲載順) 洋野町立中野小学校／気仙沼市立面瀬小学校／気仙沼市立大島小学校／只見町立只見小学校／市川市立南 新浜小学校／市川市立妙典小学校／市川市立福栄小学校／市川市立行徳小学校／帝京大学小学校／三浦市立旭小学校／那 智勝浦町立下里小学校／大牟田市立天領小学校／大牟田市立みなと小学校／大牟田市立天の原小学校／与論町立茶花小学 校／糸満市立高嶺小学校	
2. 中学校	39
(掲載順) 北海道教育大学附属函館中学校／呉市立豊浜中学校	
3. 小中一貫校	45
(掲載順) 市川市立塩浜学園／玄海町立玄海みらい学園（前期課程・後期課程）／南さつま市立坊津学園	
4. 高等学校	55
(掲載順) 宮城県気仙沼高等学校／宮城県多賀城高等学校／山形県立加茂水産高等学校／東京都立八丈高等学校／東 京都立小笠原高等学校／神奈川県立海洋科学高等学校／学校法人大阪 YMCA／長崎県立壱岐高等学校	
5. 中高一貫校	73
(掲載順) 逗子開成中学校・高等学校／梅村学園三重中学校・高等学校／明治学園中学高等学校	
6. その他機関	81
(掲載順) 只見町教育委員会／国立室戸青少年自然の家	

# 平成29年度「海洋教育 教員研修プログラム」実施概要

日本財団／東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター／笹川平和財団海洋政策研究所  
共催事業

## 1. 研修プログラムの目的

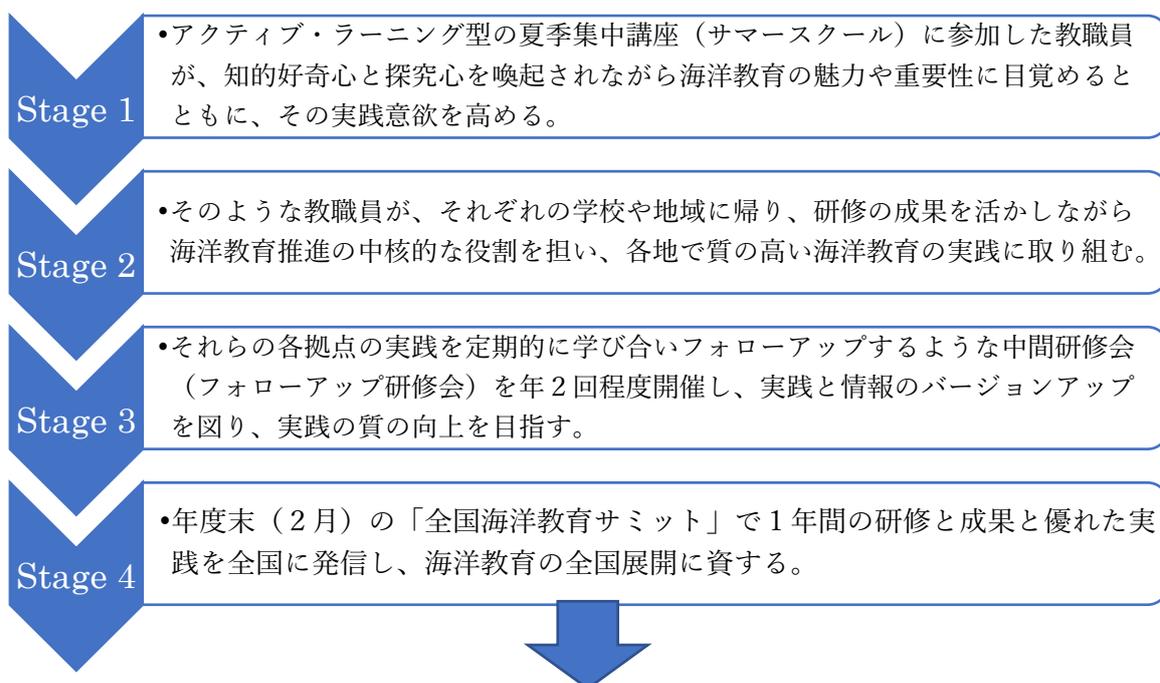
新学習指導要領や2016年の海の日の総理談話等を背景に、海洋教育の全国への普及が期待される中で、拡大・深化しつつある海洋教育の取組の持続発展的な推進と今後の全国各地域への更なる普及・拡大を図るために、各地域で海洋教育を中核的にデザインしコーディネートできるリーダー的な教職員を体系的かつ継続的に育成することで、海洋教育の質的向上と量的展開に貢献し、もって、将来に向けた海洋教育の持続可能な促進への道を拓くことをめざす。

## 2. 参加対象

参加対象者は、学校（国公立の別を問わない）や社会教育施設において、海洋教育を中核的に推進する教職員や次代を担う教職員（教育委員会指導主事や社会教育主事等を含む）

## 3. 研修プログラムのコンセプトとストーリー

研修プログラムのコンセプトを、「持続発展的な海洋教育の学びの場の創出と担い手の育成」と捉え、以下のようなストーリー性のある研修プログラムを構築する。



『持続発展的な海洋教育の学びの場の創出と担い手の育成』

#### 4. 研修プログラムの特徴

- ① 本研修プログラムに係る交通費、宿泊費及び研修費（材料費や会場費など）等の経費は、主催者が負担する。
- ② 研修プログラムは、講義や座学を最小限に抑え、フィールドワークや体験・参加型研修、学校や海洋関連施設の視察、ワークショップやディスカッションなどの「アクティブ・ラーニング型」の研修プログラムを中心に編成し、受講者（教職員等）が、楽しみながら学びを深め、かつ現場での海洋教育に活かせる実践的な研修とする。
- ③ 本研修プログラムは一過性のものではなく、2017年8月に開始し2018年2月までの間に、以下のような4回の研修会と各校・機関での実践を組み合わせた連続性とストーリー性のある研修プログラムとする。

#### 5. 研修プログラムの内容とスケジュール

時期	研修の種類	研修内容	場所	日数
8月 3日 ～ 5日	夏季集中講座 (サマースクール) ①アクティブ・ラーニング型海洋教育講座 (宿泊研修)	海洋教育の理論や方向性、カリキュラム開発の手法、東京湾岸のフィールドワークや教材開発、ワークショップ等の実践的な研修を通じて海洋教育の理解を深めるとともに、それを実践・促進するためのスキルや推進体制を構築するコーディネート力等の諸能力を体験的かつ体系的に養う。	東京大学 東京湾 市川市行徳 お台場等	2泊 3日
10月 13日 ・ 14日	フォローアップ研修Ⅰ ②各地域の実践の共有と海洋教育の質の向上 (カリキュラム改善)	海洋教育に関する最新の情報や各地域の実践や課題等を共有する共に、ワークショップやディスカッション等による学び合いを通して各地域及び学校の海洋教育の形成的な評価・改善を図り、更なる海洋教育の実践の質の向上を目指す。	東京大学	1泊 2日
11月 30日 ・ 12月 1日	フォローアップ研修Ⅱ ③地域の実践の提言 (拠点視察と情報共有)	海洋教育促進拠点における海洋教育の授業実践及びフィールドの視察、拠点の海洋教育の推進体制や課題等を共有すると共に、海洋教育の新たな視点や地域に根差した学び合いを通して、各校・各地域の更なる海洋教育の実践の質の向上を目指す。	神奈川県 三浦市	1泊 2日
2月 3日	成果報告会（全国海洋教育サミットで実施） と報告書の作成 ④研修成果の発信	「全国海洋教育サミット」の場を活用し、各地域及び学校の海洋教育の年間の取組の成果や課題を報告書にまとめ共有するとともに、外部にも発信することを通して、全国の海洋教育の普及促進に貢献する。	東京大学	1泊 2日



# 1. 小学校

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会発表資料

学校名（団体名）	岩手県洋野町立中野小学校
担当教職員名	阿部正文

単元（活動）の テーマ	お帰りにさい、また来てね
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習、海洋科）参加児童生徒（5 学年 14 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 10 月 16 日 ～ 平成 29 年 10 月 25 日（6 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものには丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

地域の海洋について学ぶ特別な教科として、「海洋科」を設定している。全学年を通して地域素材「人・もの・こと」を活かし、1、2 年生は生活科を、3～6 年生は社会科や海洋科を中心として海洋教育の取り組みをしている。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

第 2 学年で行ったサケの放流体験から 4 年経過した第 5 学年で、地域の有家川に帰ってくるサケの生態を探り、関わる海や川の環境を守り、生命のつながりを体験を通して学ぶ。また、地域が海とともに発展してきたことを実感する機会とし、持続的発展的に海と共生しようとする心情を育てる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

・第 2 学年 5 月 サケ稚魚の放流体験

学習内容	目標
オリエンテーショ ン（1 時間）	放流から 4 年が経過し「サケは 4 年間、どこに行っているのだろうか」「戻ってくるサケが少なくなってきた」など問題意識をもたせる。サケの孵化や放流の体験を通して、地域の特産の一つであるサケの生態や有家川にもどる理由などを、地域の海洋環境をもとに学習する見通しをもつ。
サケマス孵化場見 学、採卵体験 （2 時間）	サケの採卵体験をしたり、サケの生態について調べたりする。 サケが戻ってくる地域の環境について調べる。
サケについての分 析、整理（2 時間）	サケが地域にもどってくるための環境の在り方やサケの生態について新聞にまとめる。
サケの学習をふり かえる。（1 時間）	まとめた新聞を見せ合い、友達からも知識を得て、ノートに記録する。 学習感想や今後生かしていきたいこと、地域の海洋環境への思いを書く。

・第 5 学年 1 月下旬～ サケの卵、稚魚飼育体験

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

環境との関わりを意識して、サケが戻ってくる数の変化やその理由を調べたり考えたりした。また、生命の

つながりの理解を深めるために採卵体験を行った。

5) 実践の成果 (※研修内容も踏まえながら)

①海洋教育の改善の視点から

行徳干潟のフィールドワークから環境保全のヒントを得て、地域の海洋環境とサケの数に注目して活動を行うことができた。また、生命のつながりについて理解を深め生命の尊さを実感させるために、サケの採卵体験を行った。精子を混ぜ合わせた受精卵を徹底した温度管理や水質管理の中で大切に守り育てている様子を観察した。これかの活動を理科「魚のたんじょう」「人のたんじょう」や性指導と関連させつつ、生命について理解を深めることができた。

サケがたくさん産まれてほしい

地域の川にサケがたくさん戻ってきてほしい

②児童生徒の変容の視点から

東日本大震災後、サケの数が減っていることから、環境の変化が影響しているのではないかと考える子が多く、現在よりもサケの数が少なくならないでほしいと願う児童が多かった。そのためには、地域の川や海の保全や環境を汚すゴミや排水などに気を付けたい、温暖化が進まないようにしたいと考えるようになった。この学習を通して、地域の特産であるサケに注目し、意欲をもって自ら課題をもち、調べ、まとめ、表現し、共有し合うといった問題解決的な学習ができた。また、調べたことに関して新たな問いをもち、詳しく知りたいと考える児童もいた。

③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

海洋教育を本校の研究主題「問題解決的思考を培う指導の在り方」の中心にすえて研究を進めることができた。担任をもつ全担任が、生活科や社会科、海洋科の学習において海洋教育の視点を盛り込んだ授業を披露し合い、海洋教育とどのような関連があったか、関連させることでどんなよさがあったかなど、研究を深めることができた。また教職員は、海洋教育とは何か、何ができるか、何を活かすことができるかなど海洋教育に興味をもち、その意義を考える機会が多くなった。

戻ってこないサケはどうしているのか

Handwritten student work containing diagrams and text. The diagrams show the life cycle of salmon: 卵 (egg) → 稚魚 (young salmon) → 成魚 (adult salmon). The text includes questions like '戻ってこないサケはどうしているのか' (What happens to salmon that don't come back?) and 'なぜ?! 何で減った?' (Why?! Why did it decrease?). There are also notes about environmental factors like '環境が関係している' (Environment is related) and '温暖化が進まないようにしたい' (I want to prevent global warming).

6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策 (※他校や他団体に発信・普及したいこと)

- ・環境を保全する意識をさせたこと。
- ・地域の特産や携わる人々に直接触れ、体験する機会としたこと。

7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・生き物 (生命) は環境の変化にとっても敏感であること。
- ・地域を巻き込んだ環境保全の具体的取組が必要なこと。

8) 今後に向けた改善や展望

地域や他校にもよびかけ、広く海洋教育を学び合うようにしたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	宮城県気仙沼市立面瀬小学校
担当教職員名	昆野 玄

単元（活動）の テーマ	海と生きる 気仙沼
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）参加児童生徒（ 5 学年 57 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 10 日 ～ 平成 30 年 3 月 23 日（ 70 時間 ）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

1・2年生は、生活科を中心に、磯観察や唐桑半島での校外学習を通して、海に親しむ体験を中心とした実践を展開している。3・4年生は総合的な学習の時間を中心に教科横断的に、面瀬での生き物調査や面瀬の水利用についての学習を通して、里山と海とのつながりを意識した実践を展開している。5・6年生は、1年生から4年生までに学習してきたことを生かして、気仙沼の基幹産業である水産業や気仙沼の魅力について、体験的な活動及び探究的な学習を行い、その成果を発信する実践を展開している。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

- ①気仙沼の基幹産業である水産業や水産物を支える環境（自然・人）、魚食について探究する活動を通して自分たちの生活が自然環境を生かし、地域の人々の努力に支えられながら成り立っていることに気付かせる。
- ②地域が抱える課題やよさについて考えさせる活動を通して、未来に向けて主体的・創造的に生き、地域に貢献する態度を育てる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

	1 学期	2 学期	3 学期
主な活動	養殖企画展見学	港町探検	海鮮料理教室
気付き	磯の生き物調査	魚市場見学	ウカス養殖体験
課題設定	(第1次課題設定) (課題修正) (第2次課題)		
体験	→		
探究	(共通体験・個人研究)		
情報収集	→		
整理・分析	(情報収集・整理) →		
発表・発信	(発表準備・発表)		



【第5学年総合的な学習の時間年間指導計画】

【11月に行った親子海鮮料理教室】

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

- ①課題設定のきっかけを得るために、共通体験の場として、市の美術館が主催した養殖企画展を見て、気仙沼の内湾利用についても理解を深めた。

②今年度は、探究的な学習をより一層重視し、個人での探究的な学習を実践している。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

学習活動について、共同での探究から個人による探究に変更したことで、課題意識が高まり、体験的な学習を個人探究の視点から捉え、各個人が設定した課題解決のために、体験的な活動の場を生かせるようになった。

自分が調べてきたことを発信したいという意識も高まり、海洋教育子どもサミットや気仙沼市の海洋教育実践発表会において、成果を自分の言葉で説明しながら発信することができた。

### ②児童生徒の変容の視点から

市の美術館や水産試験場と連携・協働し、学習対象とのかかわり方や出会わせ方を工夫することで、児童が積極的に学習対象に関わり、多様な角度からの気づきを得ることができた。

個人での探究的な学習をすることで、一人一人の課題意識が高まり、課題解決のために必要な情報や知識を意欲的に収集する姿が見られた。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

教職員については、教師や学校のねらい・思いも共有することで、地域の方々や専門機関の方々と協働による取組ができるようになった。

保護者については、学校の海洋教育の実践により関心を示すようになった。特に、親子海鮮料理教室において、気仙沼の食材の魅力を改めて実感する保護者は多く、実際に各家庭でも作ってみたという報告が多数寄せられた。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

### ①外部機関との連携（美術館学芸員、水産試験場職員、ワカメ養殖業者、地元水産関連企業従業員）

ねらいや学習活動、質問等についての打合せを事前に行ったことで、共通理解が図られ、教師のねらいに沿った実践を展開することができた。

### ②個人探究活動の重視

個人差はあるものの、一人一人が共通体験から得た気づきを友達と共有することで、気づきの質を高め、自分事としての課題認識につなげていた。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

時数の確保が課題である。校外学習は、1回行うのに、移動や活動で計4時間分の時数を使うことになる。さらに、体験先へのお礼の手紙等を準備する時間も考えると、肝心の探究活動そのものに十分な時間を当てられなくなる危険性がある。

## 8) 今後に向けた改善や展望

校外学習を含め、活動内容を精選したい。改善策の一つとして、ゲストティーチャーを活用することで、時数の確保につなげられるところがないかどうかを検討していく。

児童の発信力と対話力を向上したい。そのためには、より探究的な学習の過程を一層重視し、様々な情報を得ながら自ら学んだ成果を発信できるよう指導を計画したい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」

平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会用

学校名（団体名）	宮城県気仙沼市立大島小学校
担当教職員名	教諭 菅原 利忠

単元（活動）の テーマ	大島の海の豊かさを感じて
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）参加児童生徒（ ～6 学年 27 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 6 月 12 日 ～ 平成 30 年 3 月 日（ 40 時間）
海洋教育の 3 つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

本校では、海に親しむ活動を全校で実施するとともに、4年生からはカキやワカメ、ホタテ等、養殖体験活動を中心に海洋教育を進めている。海とのふれあいや、養殖体験を通し、震災から復興に向かう島の人たちの苦労、工夫、喜びに気付き、海とともに生きる大島の未来を願い、考え、発信する児童の育成を目指している。

2) 単元（活動）の目的・ねらい【4 学年の実践】

- ・ 大島の環境や、それを生かして活動している人たちの取り組みについて調べることで、大島の環境の特徴を理解し、ふるさとに対する愛情を深める。
- ・ 地域の環境について進んで調べ、自分たちにできることに取り組もうとする態度を育てる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

月	活動名	活動内容	
6 7	若木浜生き物 調査探検	島内にある若木浜へ行き、磯に住む生き物を採集。 その後、採集した生き物の数や種類について調べ、大島の海に生息する生き物の豊富さを知る。	
9 10	十八鳴浜探検	島内にある天然記念物に指定されている十八鳴浜について、鳴り砂の秘密を調べるとともに、現地へ行き、清掃活動しながら自然環境を守る大切について考える。 ① 鳴り砂の秘密について調べる ② 十八鳴浜の様子を画像で確認し、ゴミが漂着していることに気付く ③ 十八鳴浜へ行き、鳴り砂を体験する。 清掃活動をする。 ④ 体験を通して、十八鳴浜の保存について考える。	
11 ～ 3	ワカメ養殖 体験	ワカメの養殖を体験したり、ワカメの生態について調べたりすることを通し、大島の豊かな海と、そこで生きる人たちの思いや願いを知り、海とともに生きることについて考える。 ① ワカメについて、資料やインターネットで調べる。	

- ② ワカメを養殖している地域の人から、大島の海の豊かさ、養殖の仕方や工夫、思いや願いを聞きまとめる。
- ③ ワカメの種挟みを体験し、定期的に生育調査をする。
- ④ 「大島ワカメ」をPRするためのパンフレット作りをする。
- ⑤ 刈り取り、塩蔵、芯抜き、袋詰め作業を体験する。
- ⑥ お世話になった方々へ大島ワカメを贈る（販売も計画）



#### 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

- ・ 海洋教育を通し、自ら課題を見つけ自ら解決していくためには、人との関わり（コミュニケーション能力）が不可欠である。そこで今年度は、地域の方とかかわる場を増やし、知識を教えてもらうことだけではなく、海にかかわる思いや願いを話していただくことを重視した。また、漁業関係者の方々の思いを受け取るだけでなく、児童の思いを伝え、「海」とおとした交流を行ってきた。

#### 5) 実践の成果

##### ①海洋教育の改善の視点から

今年度は、体験活動、調べ学習に加え、地域の方の話を聞いたり、考えを伝えたりする場を設定したことで、これまでの児童同士（横のつながり）に加え、児童と大人（縦のつながり）のかかわりをもたせることができた。そのことは、海と生きることについてより広い視点で考えることにつながった。

##### ②児童生徒の変容の視点から

地域の自然に触れることにより、自分たちが住んでいる大島の自然の豊かさを知り、その自然が当たり前にあるものではなく、多くの人たちの努力によってこれまで在り続けていることを児童は実感することができた。さらに自分たちもその貴重な自然を守ろうとする態度が養われ、十八鳴浜の清掃活動などを計画し積極的に活動を進めることができた。また、ワカメ養殖を体験することで、養殖に携わる人の苦労や工夫を知り、さらにワカメについて調べようとする探求心や、地域の方々とかかわろうとする関心が高まった。

##### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

本校は、養殖業に携わる保護者が多く、各学年の海洋教育の実践にあたって様々な協力を頂いている。保護者が海洋教育に関わることで、学校と家庭が協力して子どもを育てるという意識の高まりが生まれている。

また、今年度は本校の海洋教育の実践を報告する機会が多数あり、児童は大島地区のワカメやカキ、ホタテの素晴らしさを伝えてきた。このことは、養殖業に携わる地域の人たちの励みにもなったと考える。

#### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策（※他校や他団体に発信・普及したいこと）

本校がある、大島地区には、天然記念物に指定されている十八鳴浜をはじめ、化石採集ができる若木浜、海水浴で賑わう小田の浜など、それぞれ特徴のある海岸がある。ワカメ養殖体験も含め、一つの校区において、様々な視点から海にふれてきた本実践は、児童にとって海の不思議や素晴らしさを実感させ、海への関心を高めるものとなったと考える。

#### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

養殖体験は時期や天気が限定される。体験に都合のよい時期は、仕事に携わる方々にとっても都合のよい時期である。その中で実践に協力していただき、感謝に絶えない。

#### 8) 今後に向けた改善や展望

現在、本校の海洋教育は総合的な学習を中心に進められている。体験活動、調べ活動に加え、成果報告などの発表の場もいただいております。実践には多くの時数を使っている。今後は、海洋教育と関連させた各教科のカリキュラムをさらに整備していくことが必要である。そして将来、大島の多世代の人たちが、共に海について語り合う姿を目指し、本校の海洋教育を通して、さらに児童と地域とのかかわりを深めていきたいと考える。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	福島県南会津郡只見町立只見小学校
担当教職員名	上遠野 正

単元（活動）の テーマ	海につながる只見町
主な教科領域等	教科領域（生活科、総合的な学習の時間、学校行事）参加児童生徒（全学年 55名）
実践期間及び時数	平成29年4月6日 ～ 平成29年3月22日（ 時間）
海洋教育の3つの 柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットやHPを参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

学校行事や総合的な学習の時間に、海洋との関わりのある学習活動を十分行えるようにするため、カリキュラムを見直し、時数を多く確保した。その上で、只見の豊かな自然を体験したり、歴史と文化の観点から海との関わりを考えたり、海で活動をしたりして只見では味わえない自然の豊かさを感じ、海からの恵みを感じ、親しみを持てるようにした。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

海との関わりを視点に加えて見学や体験活動を多く取り入れた「只見学」を行うことで、ふるさと只見町は歴史的に「人との交流・物流」で海と関わっていたり、水の循環という視点でも海とつながっていたりすることを理解させる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

【全学年での活動】

①ユネスコエコパークに認定された只見の雄大な自然を味わう（3時間）  
「田子倉ダム」をモーターボートに乗って散策し、雪食地形や浅草岳などの景観を楽しむことで、只見の自然の美しさに気づくとともに、ふるさとを愛する気持ちの育成を図った。（29年5月31日）

②海に親しみ、海からの恵みを感じる活動（1日）  
八十里峠（現在工事中の国道289号線）を通り、日本海に移動した。地引網体験を通して、海の恵みを感じる事ができた。  
（平成29年6月18日）

③ふるさとの山に登る活動（1日）  
低・中学年が要害山、高学年が浅草岳の登山を行い、只見町や新潟県側の町、日本海を俯瞰するとともに田子倉ダムから流れた只見川の流れていく先に関心をもつ事ができた。（平成29年9月9日）

④只見と海との関わりを発表する活動  
3学年は、学習発表会で保護者や地域の方々に、学習したことを劇にして発表した。4・5学年は、パンフレットにまとめ配付する予定である。6学年は2月の海洋教育サミットで発表をする予定である。

【各学年の活動】

- 3 学年のテーマ 「只見の森の四季」（48時間）
- 4 学年のテーマ 「八十里を越えてやってきた歴史や文化」（49時間）
- 5 学年のテーマ 「世界に認められた只見の雪食地形・動植物・ブナ」（58時間）
- 6 学年のテーマ 「只見の将来を提言する～海とつながり、世界と結びつく～」（58時間）



- 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点
- ・ 学校行事として年間3回、3学年以上の総合的な学習の時間に、海洋教育を付加した只見学の時間として、前年度より多い年間50時間前後を確保した。
  - ・ 内陸地と海がどのように関わっているのか学年毎にテーマを設定して取り組んだ。  
3学年 只見の森の四季の変化が海洋と関わっていることを意識させた。  
4学年 郷土料理に海産物が使われているが、どこで捕られ、どこを通過して只見にきたのか考えることで海との関わりを捉えた。  
5学年 水の循環に視点を当てるとともに、大量の雪によって形成された只見ならではの地形や植生を中心に調べた。  
6学年 5学年までの学習を活かし、海との関わり、海を通して世界とつながることを意識しながら将来の只見町の姿を考えた。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

- ・ 理科や社会科を中心に海洋との関連（食物連鎖や水の循環、災害、産業等）を図りながら指導を行ってきた。
- ・ 各教科等の学習内容で海洋教育に関連する内容を整理し、教科等横断的に指導ができるように工夫・改善を図っていく必要性が見えてきた。

### ②児童生徒の変容の視点から

- ・ 行事当日だけでなく事前・事後指導でも海を意識することができる言葉かけをしたことで、「只見町」と「海」がつながっているということに気づくことができた。
- ・ 各教科等の学習において、高学年児童から「このことも海の学習と関連している。」という言葉が聴かれるなど、海を意識しながら学習している姿が見られた。
- ・ 海と直接関わる活動（地引網体験）は、児童にとって新鮮であり、海の恵みや生き物に興味を持つことができた。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・ 「田子倉湖散策」では、ボート所有者の方々、「八十里越」では、地区センター長はじめ多くの関係機関、「ふるさと登山」では、保護者、地域の方々のサポートを得て実施した。全ての方々が、子供たちの学びのために協力的である。教職員も保護者・地域の方々も内陸部である只見と海をどう関連付けるか手探りの状態ではあるが、どのようなことで海とつながっているのか捉えようとしている。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

- ・ 太平洋からも日本海からも遠い位置にあるため、全校児童で海について知る、海にふれることを中心に行った。その際、地域の方々の力を積極的に借りた。
- ・ 理科や社会科を中心に学習内容を海洋と結び付けて話すなど、海を意識できるようにした。
- ・ ユネスコエコパークに指定されていることもあり、町内は豊かな自然で溢れている。その豊かな自然を活かし、活動してきた。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・ 教職員間で海洋教育の意義等について共通理解を図り、教職員の意識改革を行っていく。
- ・ 各教科等や総合的な学習の時間、行事等の学習活動・内容の関連が図られるようカリキュラムの見直し（海洋教育カレンダーの修正と活用）を行っていく。

## 8) 今後に向けた改善や展望

- ・ 海から離れている地域で海を守るためにできることを考え、実践する力を育成するカリキュラムづくりや体験活動の充実を図っていく。
- ・ 校内研修として取り組むとともに、保護者や地域との連携をはかり学んだことを地域に発信していく。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	千葉県市川市立南新浜小学校
担当教職員名	高島 充

単元（活動）の テーマ	海とつながるわたしたち
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ） 参加児童生徒（ 4 学年 100 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 6 月 1 日 ～ 平成 30 年 2 月 28 日（ 40 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

本校は、本校の地区は「三番瀬のある東京湾」「行徳鳥獣保護区」に隣接しており、海洋環境と深いかかわりを持った地区である。海洋教育を推進するにあたり、今年度は 4 年生の総合的な学習の時間において、干潟の観察や東京湾クルージングなどの体験活動とそれに基づいた調べ学習・外部講師による干潟についての授業等を通して、海と自分たちの生活のかかわりや海洋環境を守っていくために必要なことを考えさせた。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

学区にほぼ隣接する東京湾の干潟を素材とし、海と自分たちのつながりの深さを実感的に理解できる学習や海・干潟について主体的に調べ学習を行わせることで問題解決に取り組む力を高め、自分たちの地元市川に誇りや愛着を持たせる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

海洋教育を進めるにあたり、以下の流れで実践する計画であったが、本校が行徳鳥獣保護区に隣接し、干潟の観察を容易に行える環境にあるため、計画を修正し実践した。

**1 海と自分たちのかかわりを振り返ろう（3 時間）**

- 学校周辺の航空写真や行徳湿地の写真を見て南新浜小がどういう場所にあるか考える。
- 市川市の位置について 3 年の時の学習を振り返りながら考える。

**2 干潟について調べよう（計 37 時間）**

**(1) 干潟ってどんなところ？（1 時間）**

**(2) 干潟の生き物について調べる①（5 時間）**

<テーマ例>

- ・干潟の生き物図鑑 ・干潟のカニ ・トビハゼ図鑑 ・干潟の二枚貝

**(3) 干潟に行ってみよう（4 時間）**

- ・行徳鳥獣保護区内の干潟の生き物を観察する。（行徳野鳥観察舎友の会のインストラクター 3 名の方々の指導のもと、保護区内の生き物の観察を行った。）

**(4) 干潟観察会でわかったことをまとめる（2 時間）**

- ・ミニ新聞づくり

**(5) 干潟の生き物について調べる②（5 時間）**

**(6) 東京湾に出て三番瀬を見よう（4 時間）**

- ・船で東京湾内をクルージングして、海について感じたこと、これから調べてみたくなったこと、干潟のつながりなどについて考える。

**(7) 干潟についてもっと知ろう①—行徳の干潟（4 時間）（ゲストティーチャー 風呂田利夫先生）**

**(8) 干潟についてもっと知ろう②—干潟の役割 他（4 時間）**

（ゲストティーチャー 葛西臨海水族園の方々 3 名）



トビハゼの観察・アサリを用いた海水浄化実験

## (9)「海とつながるわたしたち」の学習のまとめをしよう(8時間)(1月以降)

### 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

研修プログラムで体験したフィールドワークと専門家の先生方によるご指導で、専門的な知識を得ることができ、児童の調べ学習への助言の質が高まった。また、研修プログラムの学びから、児童のテーマはさほど広げずに「干潟」に絞っていても、十分海洋教育のねらいを達成できることがわかり、児童の調べの時間に余裕を持たせることにした。

### 5) 実践の成果

#### ①海洋教育の改善の視点から

今年度から海洋教育に取り組んだが、学習素材を近隣の干潟に焦点化して体験活動を行ったことで、海のそばで自分たちが生活していること、多様な生き物が身近なところで生息していることを実感的に理解させることができた。また、専門家の指導で、干潟の海における役割を学習することで、海洋環境の保全が重要であることを理解させることができた。

#### ②児童生徒の変容の視点から

本校の4年生の子どもたちは生き物についての興味関心が非常に高く、干潟の生き物を実際に見たり、図鑑で調べたりする活動を通して、海の生き物に対する興味関心が大いに高まった。また、干潟を中心とする海の生き物の調べ学習を通して、図書資料やインターネットから得られる情報を自分の言葉で再構成して書き表すことができるようになってきた。意味や読みが分からない言葉や漢字についても自主的に調べる姿も見られるようになり、自学の進め方のスキルが向上してきている。

#### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

南新浜小学校は行徳鳥獣保護区に隣接している小学校であるが、今まで、実際にそこへ足を運んで調査することは皆無であった。職員が子どもたちと共に体験し学ぶことで、学習素材としての干潟の有効性を実感し、今後も調査・教材開発していこうという意欲が大いに高まった。

これから、学習のまとめに入るが、子どもたちが感じたことを新聞やレポートなどにまとめ、地域やお世話になった方々へ発信していく予定である。そのことにより、海洋環境への理解や保全意識が高まることを期待したい。

### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

①干潟での採集・観察体験を行い干潟を実際に感じる一行徳野鳥観察舎友の会のインストラクターの指導

②船宿(伊藤遊船)の協力を得て行ったクルージング海に実際に出てみて感じる

③干潟のエキスパートによる特別授業で知識理解を深めるー東邦大学名誉教授 風呂田利夫先生・葛西臨海水族園の職員の方々

### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

①実際に海や干潟の生き物に触れることで児童の興味関心を高めることができたが、海の環境保全へ意識を高めていくためには、体験活動以外に自分たちの生活と海を結び付けていくための専門的な知識も与えていくことが必要である。そのためには、下水終末処理場や漁業協同組合の職員の方々などの外部講師による授業を行う必要があることがわかった。

②今年度は経済的な支援を受け可能となった活動が多かった。学校独自で海洋教育を進めるにあたって、諸費用をどのような形で準備していくかが今後の課題である。

### 8) 今後に向けた改善や展望

来年度以降も地の利を生かした体験活動を中心に、総合的な学習の時間の授業を充実させていきたい。そのためには、学校独自の具体的な全体計画・年間計画を作成し、各学年の各教科領域における海洋にかかわる学習を横断的に行っていくことが成果を大きくしていくために重要であると考えます。

また、1学期は運動会や宿泊学習などの諸行事の計画準備のため中心的な学習の開始が2学期にずれ込んでしまった経緯があった。今年度の実践を振り返り、来年度は年度当初から計画的に学習が進められるよう、各計画の作成や外部講師の手配を早めに行っていきたいと考える。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	千葉県市川市立妙典小学校
担当教職員名	山本 祐平

単元（活動）の テーマ	「守ろう！ぼくらのふるさと 江戸川・三番瀬」
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間・国語科・社会科） 参加児童生徒（第 3 学年 133 名） 教科領域（総合的な学習の時間・国語科・理科・社会科）参加児童生徒（第 5 学年 108 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 9 日 ～ 平成 30 年 2 月 30 日（90 時間）
海洋教育の 3 つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）
<p>1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験活動や人との関わりを通して、児童に川や海洋の自然の豊かさを感じさせながら学習を進めた。</li> <li>・児童が江戸川、その先に広がる東京湾に関心を持ち、そこに生きる生物の生命やそれを支える環境の大切さに気づくように学習を進めた。</li> </ul> <p>2) 単元（活動）の目的・ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・川や海に棲む生物や環境、それらの保護に携わる人々について知り、身の回りの自然や生命に関心・愛着を持つ。</li> <li>・川や海に棲む生物や環境について調べる活動を通して環境や生命の大切さ、尊さに気づく。</li> </ul> <p>3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール</p> <p><b>3 学年 「江戸川ふしぎ発見隊」</b></p> <p>①妙典の町探検をし、地域の様子を知る。（社会科） ②江戸川の河川敷を見学する。（総合） ③江戸川で生き物探しをする。（総合） ④江戸川で生き物について詳しく調査し、図鑑づくりをする。（総合・国語） ⑤千葉県ウエットランドガイドの方々と江戸川で生き物調査を行う。（総合） ⑥夏休みに江戸川についての個人研究を行う。（課外） ⑦夏休み後に個人研究発表会を行う。（総合） ⑧市川市動植物園・船橋三番瀬環境学習館の出前授業を行い、江戸川の歴史や生物についてさらに知る。 ⑨これまでの活動をもとにして学級ごとに今後の学習課題を設定する。（総合） ⑩学級の課題に応じて調査を行う。（トビハゼの生態調査、江戸川の水質調査、江戸川の歴史調査、江戸川のゴミ調査） ⑪学級の課題に応じて江戸川で釣りをしている方、河川敷で散歩をしている方、近隣の保育園、昔の江戸川を知る地域の方、遊船屋さん等にインタビューをしてさらに情報を集める。（総合） ⑫海苔すき体験（社会科）、江戸川・三番瀬のクルージング（総合）を通して江戸川、海のよさを体感する。 ⑬これまでの活動をもとにして自分たちにできることを考えて実践する。（総合）</p> <p><b>5 学年 「いのち～小豆クラブ～」</b></p> <p>①インゲン豆、トウモロコシ、イネを育てる。（理科） ②絶滅危機に瀕した植物が多くあること、その原因が河川工事にあることを知る。（国語科） ③メダカの飼育をする。（理科） ④地域の和菓子屋さんとの関わり（4 学年時）から、小豆を育てる。（総合） ⑤地域の和菓子屋さんを訪問し、小豆の育て方に関する情報を集める。（総合） ⑥江戸川・三番瀬のクルージングを通して江戸川、海のよさや命の存在を体感する。（総合） ⑦夏休みに小豆についての個人研究を行う。（課外） ⑧夏休みに交代で小豆の世話をする。（課外） ⑨夏休み後に個人研究発表会を行う。（総合） ⑩市川市動植物園の出前授業を行い、江戸川に棲む生物について詳しく知る。（総合） ⑪地域の魚屋さんによるカツオ・スズキの解体の様子を見学する。（社会科） ⑫小豆を収穫し、調理する。（赤飯・餅・団子・お汁粉・パンなど）（家庭科・総合） ⑬千葉大学生と協力して原種のカブを栽培し、種を採取することで</p>	

本来の植物のあり方を知る。(総合) ⑭アクアパーク品川を見学し、海に棲む生物について知る。(社会科校外学習) ⑮これまでの活動をもとにして、「命」についての考えをまとめる。(総合)

#### 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

- ・海洋や生物分野の専門家の方と関係を持つことができ、出張授業等の計画を立てることができた。
- ・東京湾の状況、干潟の貴重さを教員が体感したことで、使命感を持って活動を計画した。
- ・近隣の小学校と活動内容について情報交換をするなど、連携を取りながら活動することができた。
- ・研修内容を教科の学習(5年理科「流れる水のはたらき」等)に活かすことができた。

#### 5) 実践の成果

##### ①海洋教育の改善の視点から

- ・人が生活する中で海洋が果たす役割の重要性や、海の大きさを教員が感じることで、各教科の授業の際に、海洋との関連を意識して指導するようになった。海洋を軸として、各教科間の関連を意識して指導することが増えた。
- ・身近にありながら気づけなかった江戸川と東京湾の地理的な環境や生物の生態について、子どもの関心・意欲をもとに総合的な学習の時間を活用して探究することができた。
- ・専門家の方々の出張授業等を行い、江戸川、東京湾の歴史や現在直面する課題について詳しく学ぶことができた。

##### ②児童生徒の変容の視点から

- ・各教科等で学習した内容に関連があることに児童が気づいた。学習内容に共通していることは、自然を守っていくことの重要性であり、「自然を豊かにしていきたい。」と考える児童が増えた。
- ・江戸川に対する興味、知識が少ない児童が多かったが、江戸川の自然の貴重さ・大切さに気づき、進んで問題解決に取り組む姿が多く見られた。
- ・自然の大切さ、生物の貴重さ、江戸川に対する地域の人々の思いを知り、「自分たちも江戸川の自然を大切にしていきたい。」「江戸川のすばらしさを人々に知ってもらいたい。」と考えを持つようになった。

##### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・地域の機関、企業と連携して授業、活動を行うことができた。また、江戸川で釣りをしている人、散歩をしている親子、昔からの江戸川を知る方、近隣の保育園職員などに質問し、それぞれの立場から見た江戸川に対する思いや願いを聞くことができた。教員も江戸川に関する知識を深めることができた。
- ・休日に江戸川に行き、家族でカニ探しやハゼ釣りをするようになった家庭が増えた。

#### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

- ・実際に江戸川に何度も足を運んで活動する、外部講師や地域の方との関わりを持つ等児童の体験的な活動を大切にした。
- ・学習の導入時に学年共通課題(江戸川の生き物)、展開時に学級ごとの課題、まとめ時に学年共通課題(江戸川を守るために自分たちができること)を設定し、課題解決に向かって学習を進めた。(3学年)

#### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・研修プログラムに参加した教員は海洋教育の重要性を理解し、活動しているが、他の教員が同様に海洋教育を実践していくことが難しい。校内・校外研修のための時間を確保することが困難であった。
- ・江戸川に行き干潟に入る際、引率教職員の十分な確保が難しかった。
- ・江戸川は潮の満ち引きがあるため、干潟で活動することができる日時が限られる。また、トビハゼは寒くなると冬眠を始めるため、なかなか見られなくなる。計画的に学習を進めることが必要になる。

#### 8) 今後に向けた改善や展望

- ・今後も各教科、総合的な学習の時間で江戸川、海洋、環境等に関わる学習を行っていく。校内で本実践から得られた成果や課題等の情報共有を図り、来年度の活動計画を立てる。
- ・児童が江戸川の大切さに気づき、江戸川を守っていくために、自分たちができることを考えるようになった。今後も将来にわたって、自分たちが育った地域に愛着、誇りを持つために、本実践がその契機となってほしい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	千葉県市川市立福栄小学校
担当教職員名	斉藤 聡一

単元（活動）の テーマ	福栄から福幸
主な教科領域等	教科領域（ 総合 ） 参加児童生徒（ 全 学年 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 日 ～ 平成 30 年 3 月 日（ 時間）
海洋教育の3つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

- 1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略
  - ・福栄から福幸（海からの恩恵と課題）をテーマに各学年で独自に組み
  - ※今年度は、各学年期間限定的なものが多い。
- 2) 単元（活動）の目的・ねらい
  - ・隣接する海洋について学ぶことで、地域に愛着や誇りを持つことを育てる。
- 3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール
  - ・各学年それぞれやるものが異なる。
  - ただ、学年を縦わりグループにしての活動や「読書発表会」という行事でも本テーマを取り入れた。
- 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点
  - ・カリキュラムの中に本テーマをどう組み込んでいくということや学習の系統性のイメージが広がった。
  - ・フィールドワークの取り入れ方やそこでの学習の仕方が参考になった。
- 5) 実践の成果（※研修内容も踏まえながら）
  - ①海洋教育の改善の視点から
    - ・各学年で「海」について、学習カリキュラムに組み込めるもの（単元）を探し、今年度やれる所を探し、実際にやってみた。
  - ②児童生徒の変容の視点から
    - ・自分の地域と海との関連を詳しく知ることができた。
    - ・調べたことから、その先に何があるのかなど、新たな学び、探究心も生まれた。
  - ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から
    - ・保護者、地域の連携は特に変わっていない。

6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

- ・「今年度は海洋のテーマ」があるからという強制的なものにならないように努めた。
- ・子どもたち自身から出た、調べたいことを探しそれを研究させたり発表させたりすることに気を配った。

7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・ まず学校全体に取り組みの意図、「子どもに何を学ばせ、何を習得させたいか」を再確認する必要がある。
- ・ 系統学習やカリキュラム編成の際、どこで「海」について学習していくか、あらかじめ話し合う必要がある。
- ・ 行事（「縦わりグループ活動」や「読書発表会」）でどんなことを伝えていくかの練りが足りない。
- ・ 他校の取り組みを知る場が必要である。

8) 今後に向けた改善や展望

- ・ 総合（海洋プロジェクト）部会を定期的を開催
- ・ 他校との連携、情報交換をする機会の設置

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	千葉県市川市立行徳小学校
担当教職員名	掛水 裕斗（登録者） 深瀬 里美（研修参加者）

単元（活動）の テーマ	行徳・海物語
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）参加児童生徒（ 第 3～6 学年 約 710 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 6 月～ 平成 30 年 3 月（時数は学年により 15～70 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

本校では、第 3～6 学年の総合的な学習の時間において海洋教育に取り組んだ。第 3・4 学年では、それぞれ「海苔」「塩」をテーマとして新しい単元開発を行い、第 5・6 学年では、既存の学習単元の中に海洋教育の視点に立った活動を新たにに取り入れ、練り直す形で進めた。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

**第 3 学年 「つながれ未来へ！～行徳海苔の魅力を広めよう～」**

地域の特産物である「海苔」について、海苔の作り方・海苔漁に関わる仕事・販売の実情・後継者問題等、様々な視点から学び、自分たちの住む地域と海のつながり、自分の生活と海のつながりについて考える。

**第 4 学年 「行徳の『塩』のなぞ」**

戦国時代から昭和まで地域で「塩づくり」が盛んであった事実から、「塩」についての歴史やその価値、利用法、生産方法など様々な視点から学び、自分の生活や命と海のつながりについて考える。

**第 5 学年 「発見！発信！行徳っ子食堂～おさかな天国、知ってぎょ・食べてぎょ・広めてぎょ～」**

魚が嫌いの児童が多いことを課題を捉え、魚の栄養や調理法について調べたり、鮮魚店や漁業従事者など専門家の話を聞いたり、実際に自分たちが調理活動を行い試食したりする中で、自分の食生活と海とのつながり、社会経済と海のつながりについて考える。

**第 6 学年 「行徳っ子守り隊 Jr. ～家族や仲間を守り隊～」**

本校が海抜 0.9m に位置することや過去に地域が津波（大潮）によって大きな被害を受けた歴史的事実から、地震や津波から自分の命を守るために必要な知識や知恵、技能を身に付けるため、様々な視点から地震や津波について調べ、自分や地域の未来と海のつながりについて考える。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

**第 3 学年 「つながれ未来へ！～行徳海苔の魅力を広めよう～」（総合 25 時間）**

**第 1 次：地域の特産品！「行徳海苔」を知ろう！（10 時間）**

- ①海苔の食べ比べをして、「行徳海苔」の特性をつかむ
- ②「海苔」の生産場所や作り方について学ぶ
- ③「行徳海苔」の認知度調査（街頭アンケート）を行ったり、生産者に生産・販売の実情についてインタビューしたりする。
- ④「行徳海苔」の課題を見つける

こんなにおいしい秘密は何があるんだろう？



香りが良く味も濃い！

**第 2 次：おいしい「行徳海苔」の魅力を広めよう（15 時間）**

- ①保護者と一緒に海苔すき体験を行う。
- ②「行徳海苔」の魅力を広めるためのパンフレットやポスターを作り、全家庭や地域に配付したり、掲示板に貼ったりする。
- ③自分たちの生活と海について考え、学習のまとめを行う。

地域のお年寄りに、昔ながらの手すきの海苔づくりを教わったよ。



海苔作りって大変！

#### 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

##### 第3学年の実践において

生産者や販売者など、海に関わる仕事をする方との交流をもつようにした。本校は、海がすぐ近くにあるわけではないため、海と直接関わる体験をすることが難しい。しかし、第2回フォローアップ研修で水産加工場を見学し、海と関わる仕事の方と触れ合うことでも、子どもたちが海を感じる事が出来るだろうと考え、計画を練り直した。

##### 第6学年の実践において

毎年、津波について、より実感的にその怖さを知ることはできないかと考えていた。今回の研修を受け、「東京大学海洋アライアンス」の出前授業があることを知り、実際に授業を行っていただいた。前年度までは、図書資料などで漠然と分かった気になっていた児童が多かったが、シミュレーション映像などを見たことで、津波の怖さとメカニズムについてよく分かり、「津波から身を守る方法」に重点を置いて探究する学級もあった。

#### 5) 実践の成果

##### ①海洋教育の改善の視点から

当初、海洋教育は第3～6学年の総合的な学習の時間のみで行っていくことだけ考えていたが、研修を受け、各教科の学習の中でも簡単に組み込んでいけるものだと知り、そうしたカリキュラム・マネジメントをしていくことの大切さを全教職員で共通理解した。まだ、実践的なカリキュラムは作成できていないが、次年度以降、本格的に作成したいと考えている。

##### ②児童生徒の変容の視点から

水産物が地域の特産であることや、かつては塩田が広がる地域だった歴史的事実を知る中で、自分たちの住む町は、海が近くにあった場所なのだと気が付いた児童が多かった。また、地域を素材にした学習を展開させたことで、主体的に学ぶ態度が育ち、地域の方へ直接インタビューをして問題解決をしようとするコミュニケーション能力や情報収集能力が身についた。何より、地域を知り、地域の方の気持ちにふれることにより、ふるさとへの愛着が深まり、喜びと共に、今後につながる探究心の芽が育った。

##### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

第3学年の実践は、「ぜひ海苔すき体験をさせたい」という地域のお年寄りの強い要望もあり、毎年行事として行ってきた学習であった。それをしっかりと探究学習として単元開発したことで、地域の願いも学校の願いも叶えられるものとする事ができた。

#### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

本校が海から少し離れているという点から、本年度は海と直接触れ合う体験は設定せず、「人」や「もの」との関わりの中で学ぶような学習活動を展開できるように特に意識した。今後は、地域で遊船業を営む方の願いを受け、船に乗って海に親しむような活動も取り入れ、より体験的に学べる計画に改善していきたい。

#### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

本年度は4つの学年で単元を作成し、実践してきた。その各学年での学びがつながり、深められるよう、全教職員で各学年の実践を共通理解していくことが必要である。また、小学校での学びを中学校へとつなげていくことも課題である。

#### 8) 今後に向けた改善や展望

第3・4学年で開発した単元は、市川市の南側（海側）の地域ではどの学校でも展開が可能な内容にすることを意識し計画を立てた。次年度以降、本校でも実践を継続させ、より良い学習に練り上げていくと共に、本単元を広く市内に発信することで、多くの教員の視点で見直していきたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名(団体名)	帝京大学小学校
担当教職員名	村越 一宏

単元(活動)のテーマ	沖縄について～海洋・平和教育を通して～
主な教科領域等	教科領域(理科、自然科) 参加児童生徒(4学年35名、6学年38名)
実践期間及び時数	4学年 平成 29年 5月～平成 29年 7月(20時間) 6学年 平成 29年 9月～平成 30年 1月(30時間)
海洋教育の3つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。(※センターのパンフレットやHPを参照) ①環境 ②生命 ③安全 ④その他( )

活動報告

1) 学校(団体)全体における海洋教育の取り組みの概略

①海に親しむ活動

- ・体験活動→海に対する興味関心(千葉県沿岸での磯学習) ※4年生のみ

②海を知る活動

- ・海の生き物についての調べ学習 ※4年生、6年生のみ

2) 単元(活動)の目的・ねらい

- ・「海に親しむ」「海を知る」学習を通して、海の自然に関する興味関心をもつ。
- ・沖縄の歴史や文化を調べることを通して、平和を大切にしようとする心をもつ。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

<4学年>

- 5月 海の生き物について調べ学習  
磯学習を行う際の注意点を学ぶ
- 6月 千葉県沿岸での磯学習

<6学年>

- 9月 「沖縄」についてのイメージマップづくり(海・平和)  
「海についての学習」を進める上での目標立て  
課題の設定(グループ分け)  
調査内容・調査方法・まとめ方の決定
- 10月 グループごとに調べ学習
- 11月 グループごとに調べ学習
- 12月 グループごとに調べ学習
- 1月 学習報告会
- 2月 修学旅行、振り返り

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

他の海洋教育研究指定校が実践しているカリキュラムを知ることで、海洋教育の全体計画(グランドデザイン)や海洋教育の学習過程、「海に親しむ」「海を知る」「海の利用」「海を守る」の各段階の学習活動を知ることができた。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

海洋教育研究指定校のカリキュラムを参考にして、海洋教育の学習過程モデルを作成し、それに基づいて海洋教育を進めることができた。子ども達の主体的な学びを促すために、4年時の海洋体験の様子や昨年度の修学旅行（沖縄）の様子を、写真資料をもとに振り返らせ、児童一人ひとりの「海への興味関心」を高めさせることができた。

### ②児童生徒の変容の視点から

「海についての学習」を通して、海の生き物について進んで調べようとする資質・能力が身についた。また、海洋教育の学習過程モデルに沿って問題解決的な学習を進めたことで、「課題設定能力」「情報活用能力」「情報収集能力」「コミュニケーション能力」等も高めることができた。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

海洋教育の全体計画（グランドデザイン）や海洋教育の学習過程、「海に親しむ」「海を知る」「海の利用」「海を守る」の各段階の学習活動を例示し共有したことで、他の教職員も、それらをベースに独自の海洋教育を進めやすくなった。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

子ども達の主体的な学びを促すために2度にわたる海洋体験（4年時：千葉県沿岸での磯学習・水族館見学 6年時：沖縄での水族館見学）を実施し、「ブリーフィング」を重視した学習活動を展開することができた。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

子ども達の主体性を重視したあまり、「海を知る（海の生き物）」というテーマにばかり子ども達の意識が向いてしまい、「海の利用」「海を守る」の各テーマについて課題を設定する子どもが少なかった。そのため、テーマの偏りがなくなるよう、教師が意図的にテーマを設定し、「海と人との共生」につながるようなカリキュラム開発を行っていく必要がある。

## 8) 今後に向けた改善や展望

「海に親しむ」「海を知る」「海の利用」「海を守る」の各テーマにおける学習活動の創造やそれに基づいたカリキュラム開発をさらに進めていく。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	神奈川県三浦市立旭小学校
担当教職員名	中山賢一

単元（活動）の テーマ	生き物大好き
主な教科領域等	教科領域（生活科）参加児童生徒（2 学年 25 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 5 月 8 日 ～ 平成 30 年 3 月 9 日（45 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

三浦市海洋教育研究所の支援の下、水槽（約 200ℓ）を 6 つ購入し、海洋生物の飼育をしている。地域の漁師に全面的にご協力いただき、三浦の海に暮らす様々な海洋生物を提供していただいている。また、ワカメの養殖体験を行うなど、地域に支えられての海洋教育を推進している。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

- ・ 継続的に海洋生物を観察することを通して、その変化や成長の様子、生態などについて関心をもつ。また、それらは生命をもっていることに気づき、親しみをもつとともに大切にしていこうとする。
- ・ 三浦の海の豊かさやそこに従事している人々の思いに気づき、三浦の海について誇りをもつ。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

- ・ 年間を通して、継続的に海洋生物の観察を行う。節目ごとに、自分たちで発見したことや気づいたこと、調べて分かったことなどをまとめて、相互交流している。また、授業参観等で保護者に対してお気に入りの海洋生物をプレゼンテーションするなど発信にも力を入れている。
- ・ 図工とリンクさせ、お気に入りの生き物を「立体」にする造形活動を行う。
- ・ 外部講師として、海洋生物を提供してくれている漁師を招き、種類や生態等について説明していただく。また、海で従事することの苦労や喜びについての話も併せてうかがう。
- ・ 海洋生物を飼育している飼育委員（高学年）から説明を受けながら、エサやり体験や水槽の清掃体験を行う



5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

- ・ 年間を通して、いつでも海洋生物の観察ができることが本実践の強みである。継続して飼育し続けることで、季節ごとに捕れる海洋生物の種類が変わるという気付きが得られたり、産卵や共喰い、捕食や共生など自然界で行われている営みを垣間見たりすることができた。
- ・ 「生命」だけではなく、「環境」や「安全」など、学年の発達段階に応じて様々な教育プログラムを組み合わせることができる可能性がある。

### ②児童生徒の変容の視点から

登下校時や休み時間に自ら進んで水槽を観察する姿が見られる。授業の相互交流で得た気付きや疑問を家庭で調べてくる児童も増えてきた。海洋生物に対する関心意欲の高まりが感じられる。また、主体的に対象生物とかわかることで、他の生物と比較して生態を理解するなど、豊かな気付きが生まれている。さらに、死んでしまった理由を考え解決案を出すなど、自分たちなりに考えたり、工夫したりするなど課題解決力も身につけてきた。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・ 地域の漁師に全面協力していただいた実践である。はじめは、一人からスタートしたが、その方が仲間の漁師に話を広げてくださり、今では「変わった海洋生物が上がったら、旭小に持っていけ。」という雰囲気が出来上がっている。多くの漁師が足を運んでくださるようになり、児童との交流も進んでいる。
- ・ 環境を整えることで、「学び」はスタートする。水槽を置き、海洋生物を飼育し始めると自然に子どもたちの興味関心を引き、それに呼応するように教職員の指導意欲も高まっていった。

### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

海洋生物の飼育を始めてみると、意外に素人でも飼育可能なことが分かった。地域の方々は、「何か学校に協力できないか。」という姿勢をもたれているので、外部資源を最大限に活用すると、豊かな教育環境が整えられることが分かった。

### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・ 海洋生物の飼育では、当然のことながら生き物の「死」と向き合わなければならない。児童の目の前で、捕食されることもある。(タツノオトシゴが出産する場面に遭遇したが、生まれるとすぐに捕食されてしまった。)
- ・ そこから、何をどのように学ばせるかを検討し、ねらいを明確にしておく必要がある。
- ・ 水槽の管理や地域協力者との調整を教頭が行っているが、校務分掌上にどう位置付けていったらいいか。

### 8) 今後に向けた改善や展望

- ・ 低学年の豊かな学びを、高学年の学びにどうつなげていくか。学校全体としての系統だったプログラム作りが必要である。
- ・ 漁師が届ける海洋生物とは別に、児童自らが捕まえた身近な生き物を飼育することで、比較したり関係づけたりするなど科学的な見方や考え方を育成することにつながることを期待できる。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	和歌山県那智勝浦町立下里小学校
担当教職員名	岡 史博

単元（活動）の テーマ	もっともっと、ふるさと“那智勝浦” “和歌山”の海を知ろう！
主な教科領域等	教科領域（「海の時間」、総合、生活科 他 ）参加児童生徒（ 全 学年 95 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 5 月 1 日 ～ 平成 30 年 2 月 28 日（ 140 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

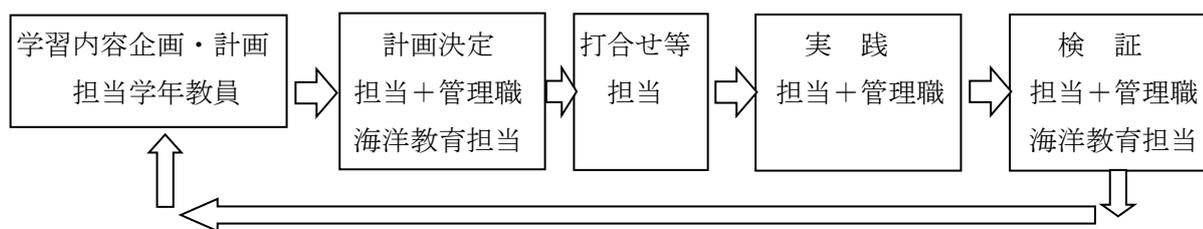
1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

教育課程特例校として「海の時間」を設定し、2 学年は年間 20 時間、3～6 学年は年間 25 時間を海洋教育の履修時間として設定している。学校が自然豊かな海岸部に位置する立地条件を活かして様々な体験活動や地域の人材を活用して海洋についての理解を深めている。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

海に隣接する学校として、自然としての海の景観のすばらしさ・美しさを知るとともに、海とともに歩んできた歴史があること、海の恵みを最大限に生かした産業に大きく支えられてきたことを知る。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール



◎実践内容について、検証が確実に行われ成果が継承されてゆく仕組みを構築する。

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

昨年度の取り組みと比較して、活動内容を学校での各教科の学習内容や海洋教育の理念を可能な限り反映したものにすることができた。具体的には、海洋教育の学習時期を教科の履修時期とそろえることで学習効果を高めた、また児童の実態に合わせて海洋教育の実習内容を適切に選定することができた等である。これらは管理職が研修に参加することで海洋教育についての理解を深め、職員への適切なアドバイスや指導が行えたことで改善につながった。

5) 実践の成果

①海洋教育の改善の視点から

研修から学んだことを活かし、直接児童の指導にあたる教員と十分に話し合い海洋教育の理念について伝

えることができた。結果として学校全体の海洋教育への理解を深めることができた。また、学習活動においては外部の講師や施設を利用する場合のプログラム内容について、海洋教育の目的を十分反映させることができた。

#### ②児童生徒の変容の視点から

昨年度と同様の取り組みを継続して実施することで、全ての児童が海洋生物に自然と触れ合うことができるなど海を身近なものとして感じると同時に海への関心や興味、理解を深めることができた。また、今年度新たに加えた「シュノーケリング体験」や「イルカに触れ合う」体験学習のプログラムは、当地方に在住していても経験することが少なく子どもたちには非常に貴重な体験となり、自然を今までとは別の視点から観る能力を育成できたと考える。

#### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

本校の行う海洋教育と関係団体との調整のため博物館の学芸員、地域の保護団体の方、インストラクターの方々と昨年度以上に綿密な打合せを行った。会合の回数が増えたことにより、互いの意思疎通が円滑になるとともに学校の海洋教育の目的への理解を深めていただくことができた。また、地域の自然環境や社会的な状況についての教職員の意識を高めることができた。

#### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

博物館など学校の学習内容に応じた学習プログラムを準備することができ、遠足や見学等の学校行事のなか含め容易に海洋教育の実践を行うことができるということを発信したい。

#### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

本校の場合、学校規模から海洋教育を推進するための主に人材面での資源が限定される点が克服すべき点である。また、海洋教育に係る実践に関して形骸化せずに質の高い体験学習を持続させるには、人事異動が伴う学校という組織の特性を充分考慮した上で研修や研究を進めなければならない。

#### 8) 今後に向けた改善や展望

小規模校のため校務分掌上の担当者が一人のため海洋教育についての理解や熱意が個人レベルにゆだねられる危険性がある。今後も海洋教育を持続的に推進してゆくためには校内組織を確立しなければならない。今後はより組織的に取り組むため校務分掌の組織改編を行いたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」

平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修会資料

学校名（団体名）	福岡県大牟田市立天領小学校
担当教職員名	奥蘭 信宏

単元（活動）の テーマ	「つながろう！つなげよう！私たちと諏訪川と有明海」
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間、理科、社会）参加児童生徒（ 5 学年 60 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 10 月 5 日 ～ 平成 29 年 3 月 15 日（予定） 時数合計 40 時間（理科 3 時間、国語 6 時間、総合 31 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

3 年生では、海に「親しむ」をテーマに、3 校合同干潟観察会を行い、体験からの気づきや調べてみたいことを辞典や GT から聞き、他校に向けて海洋イベントを行うことができた。

4 年生では、「海を知る」をテーマに、干拓について、大牟田市に伝わる「がたいね踊り」体験や干拓や堤防見学を行い、干拓をしていった先人達の思いを知り、友達に発信するために干拓新聞を作成した。

5 年生では、「海を守る」をテーマに、有明海につながる諏訪川でのカヌー体験や水質調査を行い、川や海を守りたいという思いをもたせ、地域や他校に発信できるにポスターやビデオレターなどを作成した。

6 年生では、「海を利用する」をテーマに、有明海を 3 校合同クルージングをし大牟田のまちを多面的に見るようさせた。そして、世界遺産である三池港を中心に未来の大牟田について考え、TV 会議で 3 校と交流した。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

本校区内にあり、有明海に注ぐ諏訪川でのカヌー体験や水質検査を通して、川や海の現状を知り、資料を活用し、価値を追究したり、自分たちにできることを考えたりして、自分の考えを表現することができる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

	10月	10月	11月	12月	12月・3月
	課題設定	課題追求	整理・分析	課題追求	行動 発信 ふり返り
総合的な学習の時間	諏訪川の上流・中流・下流の水質や周辺の環境を調べよう。カヌー体験をして、諏訪川に親しもう。	諏訪川の水質調査から分かったことや、諏訪川や有明海の魅力を発信し、後世に引き継いでいくためにはだれにどんな方法で表現するといいか考えよう。	これまでの調べことから考えたことを相手によりよく伝えるための方法を考える。	自分たちの考えを見直し、よりよいものを創り出す。発信相手を具体的に追求する。	それぞれの発表方法で交流し合う。諏訪川をきれいにしよう
	○諏訪川の上流・中流・下流の様子を実際に見学したり、水質検査を行い、諏訪川の実態をつかむ。 ○GTを招き、諏訪川周辺にいる生物について話を聞く。 ○カヌー体験を通して、諏訪川に親しむ。	○諏訪川の水質調査をもとに、清掃活動を行い、水質がどのように変化するのかを調べる。	○ポスターや新聞、ビデオレターの構成や資料を考えたり、イベント内容を表現方法を考えたり自分たちが伝えたいことが効果的に相手に伝わるような発表方法を追求する。 ・プレゼンテーション ・ポスターセッション ・ビデオレター	○表現物をGTに評価してもらい、ポスターや新聞、ビデオレターの構成や資料を見直したり、イベント内容を見直したりする。発信相手を具体的に探し、連絡を取る。	○家族や地域、他校や在校生に向けて、自分たちの考えを発信し、活動のよさをGTに評価してもらったり、自分の考え方の高まりを振り返る。 ○3月に諏訪川でカヌーにのり清掃活動を公民館の方々で行う。

**【課題設定場面】**

近くの公民館付近で、諏訪川でカヌー体験を楽しむ。

**【課題追求場面】**

GT や専門家の助言から話し合い、よりよいものを作り上げた。

**【行動・発信場面】**

地域にポスターを掲示したり、在校生に魚の折り紙をプレゼントしたりした。



#### 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

研修プログラムを通して、海洋教育を進める上で机上の学びに終わることなく、直接体験を通じての学びが重要であるという立場に立ち、直接体験を通じた学習を単元の導入として位置づけ、子ども達の意欲を高める工夫を行った。また、課題設定・探求活動・発信が連続した学習になるように、子ども達が考えたポスターやチラシなどに対して、課題を GT や公民館の方々からいただき、よりよいものにした。最後に、再度カヌーを使った清掃活動という体験活動で締めくくることがにより、学びの意義を再確認する予定である。

#### 5) 実践の成果

##### ①海洋教育の改善の視点から

最初は、何から始めたらいいのか全く分からない状態からのスタートだった。研修を受け、直接体験を組むことの大切さを学び、導入と終末に仕組むことにした。また、国語や理科のなどの教科について、単元の指導計画を見直し、水のはたらきや資料を活用して説明する学習を、諏訪川を教材として取り扱った。

##### ②児童生徒の変容の視点から

諏訪川で遊んだ経験は22%、催しを知っている児童はわずか4%であった。本学習を通して、諏訪川に関心をもった児童は87%となり、子ども達にとって川や海が身近な存在になったと言えることができる。また、川や海の魅力を伝えるために、生き物や植物、環境を調べたりすることで、生き物の名前や、川の長さを知るなど、知識・理解の高まりも見られた。また、環境を守るためには、地域に呼びかけたり、自分たちが生活排水に気を付けたりするなど、自分たちができる保全活動をしていく態度も高まったように考える。

##### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

今回、諏訪川の流域にある公民館と連携し、カヌー体験を行った。安全面で万全を期すために、保護者にも協力を呼びかけた。子ども達が楽しくカヌーをしている姿を見て、休みの日にカヌーをさせたいと願う保護者もいた。また、ポスターを地域の公民館やお店に貼らせてもらうなど、地域や他校と新しく連携するようになった。

#### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

本実践では、体験活動（カヌーや水質検査、砂浜遊び、川で流れる体験等）から言語活動（ポスター、イベント、チラシ、ビデオレターなど）、体験活動（カヌーを用いた清掃活動）へと学びが続くように計画し、実践していった。魅力的な直接体験は子ども達に、「海や川を守りたい」という思いをもつのに非常に効果的だった。また、そこで係わった人からの助言は、自分たちの考えをより高めたいという動機付けになった。

#### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

本校では、肢体不自由の児童が2名在籍している。配慮が必要な児童にどのように体験活動をさせていくのか複数の案を考えておくべきであった。経済的な面で今後継続した活動をさせるには工夫が必要と考える。

#### 8) 今後に向けた改善や展望

来年度の年間指導計画を作成していく上で、今年度のストーリーマップやESDカレンダーを利用し、各教科との関連の明確化、焦点化し作成していきたい。また、ポスターやチラシ作りなどの言語活動の工夫をしていきたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	福岡県大牟田市立みなと小学校
担当教職員名	境 真作（教諭）

単元（活動）の テーマ	大牟田の近代化遺産の魅力を見出し、その魅力を発信しよう！
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）参加児童生徒（ 第3～6学年 187名）
実践期間及び時数	平成 29年 5月 1日 ～ 平成 30年 1月 31日（約35時間）
海洋教育の3つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットやHPを参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

「有明海や三池港、その周辺の施設や関連する近代化遺産について関心をもち、それらの魅力を見出し、その魅力を大牟田市の持続発展のために生かそうと考えることができる子ども」を目指す子ども像として設定し、第3学年から第6学年までの4年間を通して、身に付けさせたい資質・能力を計画的・段階的に育むことをねらいとする。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

海洋教育の4つの柱を各学年の発達段階等を考慮して2つずつ位置付け、学習活動を展開していく。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
単元	みなと校区 自慢隊	三池港の 秘密を探ろう	世界遺産だけじゃない 三池港	大牟田の魅力を 発信しよう
海洋教育の柱	海に親しむ 海を守る	海を知る 海を守る	海を知る 海を守る	海を利用する 海を守る
内容	・干潟観察 ・有明海の幸	・三池港の歴史 ・団琢磨 ・干拓	・三池港周辺の施設 ・三池港クルージング	・三池港と近代化遺産 との関わり ・世界遺産見学
子どもに蓄積する 体験・知識	・干潟の楽しさ ・タイラギ ・ワラスボ ・ムツゴロウ	・三池港の総工費 ・閘門の仕組み ・団琢磨の言葉 ・独特の形の理由	・夜の工場 ・三池海水浴場 ・釣りスポット ・海上保安庁	・石炭をキーワードに したつながり ・海から見た三池港の 様子
表現	リーフレット	クイズ新聞	三池港パンフレット	観光パンフレット

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

- 今までは書籍やインターネットを活用して調べ学習をしてまとめる活動が多かったが、直接体験することの重要性を理解し、今年度は実際に有明海の干潟や三池港、クルージング体験に行き、直接体験をする機会を多く設定した。
- 学んだことを発信する場がなく、自分たちだけの学びで終わることが多かったが、学びを深めたり広げたり

することの重要性を理解し、大牟田市にある他の2校の小学校と学びを発信し合う場を設定した。

- 地域の方々と共に海洋教育を進めていくことの必要性を実感し、地域の方々との連携を密にし、学習内容に合わせてゲストティーチャーとして来ていただく機会を多く設定した。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

- 直接体験活動やゲストティーチャーとの関わりを単元の中に意図的・計画的に位置付けて学習活動を行ったことで、教師が教え込むのではなく、児童が自ら課題意識をもち、協働的に問題解決をする学習活動を展開することができた。
- 海洋教育の柱や内容、子どもに蓄積する体験・知識を設定したことで、教師が児童に身に付けさせたい資質・能力を明確に意識して学習を展開することができた。

### ②児童生徒の変容の視点から

- 直接体験をする中で、多くの児童が海に対する興味・関心をもつことができたと共に、そこから新たな課題が生まれ、学習の内容が発展していった。自ら課題意識をもち、探究していく姿が多く見られるようになった。
- ゲストティーチャーと関わったり、他の小学校の児童を交流したりする中で、様々な人とコミュニケーションすることへの抵抗が少なくなると共に、何事に対しても物怖じせず、自分の考えや気持ちを表出することができる児童が多くなった。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- 今までには一部の教師だけが海洋教育を推進していることが多かったが、年度当初に及川先生の御講話を受けたり、校内で研修会をしたりしたことで、教師集団が一丸となって海洋教育を推進しようとする気持ちをもつことができた。
- 保護者や地域の方々が来校したり、児童と関わる機会が増えたりしたことで、今まで以上に学校が開かれて、学校で行っている教育活動の内容についての理解を深めてもらうことができた。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策（※他校や他団体に発信・普及したいこと）

- 第3学年から第6学年までの4年間の中で、児童に身に付けさせるべき資質・能力を明確にし、計画的・段階的に設定した上で学習活動を展開したこと。
- 学びを深めたり広げたりできるように、市内の他の2校と合同で海洋教育を行い、同学年だけではなく、異学年と交流する場面を多く設定したこと。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- 直接体験やゲストティーチャーとの関わりを多く設定する中で、教師が下見をしたり、ゲストティーチャーと密に連絡・調整をしたりする等、事前の準備や打ち合わせの重要性を再認識した。
- 他校との交流の際に、どんな力を身に付けさせたいのかを各学校の教師が共通理解しておくことに課題がある。

## 8) 今後に向けた改善や展望

- 今年度の成果と課題を3学期中に整理し、それを基に来年度の各学年の海洋教育の年間指導計画を修正する。
- 市内の2校との交流の際にテレビ会議を活用したが、来年度は市外や県外の学校ともテレビ会議を行う。
- 異動等も含めて、全教職員が同じ方向に向かって海洋教育を推進できるための体制作りや研修会を計画・実施する。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	福岡県大牟田市立天の原小学校
担当教職員名	龍 ちひろ

単元（活動）の テーマ	流れる水のはたらき
主な教科領域等	教科領域（ 理 科 ）参加児童生徒（ 5 学年 4 4 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 11 月 22 日 ～ 平成 29 年 12 月 8 日（ 13 時間）
海洋教育の 3 つの柱との関連	①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

- 1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略  
 第3学年～第6学年の総合的な学習の時間、理科、社会、道徳で実施している。  
 第3学年・4学年では、海辺の生物調べや清掃活動を行い、海にはたくさんの生物がいることに気づかせるとともに、海の環境保全についての課題意識を持たせることを目的とする。  
 第5学年では、川が海に与える影響を調べ、海の環境を守るためには森の環境を守らなければならないことを理解し、森・川・海をつながりを見いだすことを目的とする。  
 第6学年では、大牟田市の環境の変化に関心を持ち、教室の蛍光灯を使用するときの二酸化炭素排出量を調べたり、温暖化が海に及ぼす影響について調べたりし、海や川とのつながりから環境補背の大切さを捉え、自分たちにできることを考えて行動し、その取組を発信することを目的とする。また、他校と交流することで、地域の川や海の良さや課題を知り、見つめ直している。

- 2) 単元（活動）の目的・ねらい  
 地面を流れる水や川のはたらきについて興味・関心をもって追究する活動を通して、流水のはたらきと土地の変化の関係について条件を制御して調べる能力を育てるとともに、それらについての理解を図り、流水のはたらきと土地の変化の関係についての見方や考え方をもちつことができるようにする。また、海洋教育の視点として、総合的な学習の時間に学習した「野間川環境調査隊」と関連させ、校区にある野間川や、有明海に繋げたり、めあてをつかませるために海の環境を考えたりさせる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（表の中は 8 pt）

段階	配時	学習活動と内容	教師の支援○ 海洋教育の視点●
つかむ	①	1 単元の学習課題をとらえる。 ○大雨時と普段の川の様子を比較し、川の水や川原の様子から、流れる水がどんなはたらきをもつか話し合う。 流れる水にはどんなはたらきがあるのだろうか。	●野間川や有明海見学を事前に行わせ、川について調べたいという意欲を持つことができるようにする。
調べる	① ① ① ① ①	2 流れる水のはたらきと土地の変化の関係を調べる。 (1) 流れる水の3つのはたらき（運搬・侵食・堆積）があることを捉え、増水すると3つのはたらきが大きくなることを調べる。 ①これまで学習してきたことから予想し、実験の計画を立てる。 ②流水実験をし、流れる水のはたらきをまとめる。 ③増水したときの3つのはたらきについて予想し、実験の計画を立てる。 ④増水したときの3つのはたらきを調べる。川と海が繋がっていることを確認する。 ⑤川が曲がっている部分の流水実験をし、外側と内側の違いをまとめる。  (2) 上流と下流の川原の石の大きさや形の違いと流れる水の働きとの関係を調べる。 ①これまで学習してきたことから予想し、実験の計画を立てる。 ①石をけずる実験をし、結果をまとめる。考えを交流してまとめ、上流と下流の川原の石の大きさや形の違いを確認する。  (3) 流れる水のはたらきで土地がどのように変化するか調べる。 ①これまで学習してきたことから予想し、実験の計画を立てる。 ②動画や写真で観察をし、結果をまとめる。 ③考えを交流してまとめ、川と海が繋がっていることを確認する。	○条件を制御した実験を計画させ、予想を検証することができるようにする。 ●野間川と有明海に見立てた流水実験を行い、川と海が繋がっていることを捉えさせ、海の環境に目を向けることができるようにする。
生		3 学習したことをもとに、洪水に備える工夫や川の利用について調べ、	○●野間川や諏訪川見学時の写真を提示して、洪水

か す	② ①	川と自分たちの生活について理解を深め、単元のまとめをする。 (1) 洪水のようすや備える工夫について調べる。 (2) 「たしかめよう」に取り組む。	対策と川の実環境保守の両立について考えることができるようにする。
--------	--------	---	----------------------------------

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

カリキュラム開発の研修において、教科学習で海洋教育に関係しそうなものを講義やグループ協議から考えた。このことから、本実践の単元全体において、海洋教育の中の3つの柱を教員が意識して教具を工夫したり、児童の活動の視点（上記の表を参照）として取り上げたりした。

また、総合的な学習の時間の「野間川環境調査隊」で川の生物調査や水質調査から現在の川の環境と関連させ、「海を守る」ことに重きを置いた横断的な指導を行った。

5) 実践の成果

①海洋教育の改善の視点から

カリキュラム開発において、理科の内容を海洋教育の視点で見直し、総合の学習と関係のあるものを重点として学習活動を考えた。単発のものとして海洋教育を位置付けるのではなく、学びを繋げることで広い視野で物事を考えたり、生活レベルで考え実践したりすることに繋がった。

②児童生徒の変容の視点から

- ・海洋教育の中の3つの柱を教員が意識して教具を工夫したり（項目6参照）、児童の活動の視点として取り上げたりしたことで、児童が自然と川と海の繋がりを持つ視点を持って学習に臨めた。
- ・総合の学習と関連させたことで、「実験結果から、流れる水のはたらきには、浸食・運搬・堆積のはたらきがあり、野間川のゴミや汚れた水が運搬されて、有明海に堆積することが分かったので、野間川にゴミを捨てないことや、清掃する必要がある。」「自分たちにできることを考えて実行することが大切。」等の考えが見られた。理科と総合の学びに繋がりを持つことができ、川の環境を守ろうとする態度が身についた。また、地域の川や海を扱ったことで疑問が生まれ、その疑問を解決するために、実験を通して主体的に調べることができた。

③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・各地区の公民館や市役所に野間川を守るポスターを掲示したり、福祉の集いで野間川の現状と改善するために自分たちができることを劇で表現したりする等、啓発している。

6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

○教具の工夫（川上真哉先生からのアドバイスを活用）

- ・教科書は、土を盛り、溝を掘って川のみを作り実験していた。総合の学習で、川が海と繋がっており、川の環境を守ることは、海の環境を守ることに繋がることを学習したので、実験装置に海も付け加えた。（写真②）
- ・水の量を増やすと、流れる水の3つのはたらきが大きくなることを捉えるために、通常時と増水時の実験を両端から行い、視覚的に比べやすくした。（写真①）
- ・生活に繋げるために、上流から下流・海の視点を地域の川や海に置き換えた。（写真②）



【写真①】



【写真②】

7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

○教訓

教材を海洋教育の視点で見直すことにより、子どもの教科での学びの中に、生活に繋がる視点が加わり、理科の知識・理解にとどまらず、深い学びに繋がった。このことから、教材研究を行う際に新たな視点を持つことで、学習内容や方法に工夫が生まれ、より深い学びに繋がることを学んだ。

○課題・困難

- ・全学年分のカリキュラム開発
- ・学年間の海洋教育の視点をもった教科・領域の学習内容の縦の繋がり可視化
- ・授業をするために具体的な内容や方法など、教材を見直す時間の確保

8) 今後に向けた改善や展望

他の地域の先生方が実践されている方法の共有化や東京大学の先生方に学習方法や教材・教具開発などのアドバイスを頂きながら、生活と繋がりのある海洋教育を進めていきたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	鹿児島県与論町立茶花小学校
担当教職員名	町島 円貴

単元（活動）の テーマ	与論の海を守りたい
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）参加児童生徒（ 5 学年 31 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 5 月 27 日 ～ 平成 30 年 2 月 28 日（ 30 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

海の生き物を見つけたり，グラスボート体験をしたりしながら，海に親しませる。その中で出てきた「この生き物は何？」「どうして海がきれいなのか？」「サンゴって何？」等の疑問から，環境保全の活動に携わっている方をゲストティーチャーに招き，特別授業をしていただく。その中で学んだことを学習発表会や新聞等にまとめながら，「一人一人が自分で考え，自分のできることをしていく」という環境保全の実践につなげていく。最終的には，与論の海の魅力をパンフレットにまとめ，情報発信していく。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

珊瑚礁に囲まれた美しい海。この，多くの人が憧れる与論島でも，海や自然は子どもたちにとって「背景」になっている。児童の遊びや生活は都市部とさほど変わらない。そんな子どもたちに，与論の豊かな海と親しむ活動・環境保全の活動を通して海への関心を高めるとともに，海と産業とのつながりについても理解させ，持続可能な社会の形成者としての資質，能力，態度を養うことが，本単元のねらいである。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

③ クリーン作戦（10月）



① 海の観察（5月）

この生き物の名前は何？  
サンゴって植物？動物？  
どうしてこんなに海がきれいなのか？

② グラスボート体験（7月）

砂浜よりも道路にゴミがたくさん落ちているね。  
砂浜や海になれば海には関係ないのかな？  
海や魚の害には・・・ならないのかな？

④ ゲストティーチャーによる特別授業（10月～12月）

No.1 サンゴのひみつ  
No.2 サンゴの恵み

No.3 サンゴのピンチ  
No.4 海を守るために  
実践していること



40年前と比べると，どうしてこんなにサンゴが減ったのだろう。



- ⑤ 学習発表会での中間発表（11月）
- ⑥ 学んだこと・実践していくことの発表（ゲストティーチャー・保護者へ）（1月）
- ⑦ パンフレット作り（1月～2月）

#### 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

『海洋教育の3つの柱「安全」の視点からの海洋教育』の講義を受け、授業中以外での避難訓練の実施を1月に組み入れ、掃除時間にミニ訓練として実施することになった。今後も、様々な状況をより実際に即して考え、年間を通じた「安全」の視点からの教育について考えていきたい。

#### 5) 実践の成果

##### ①海洋教育の改善の視点から

今年始めたばかりで、今はまだ手探りの状態である。しかし、職員も海や地域について知らないことが多く、学校の中だけでは何も進まなかった。しかし本研修において、海洋教育が地域と密接にかかわっていることを知った。そこで、地域で実際に海に触れ、海を守る研究をしていらっしゃる方をお願いし、教師も一緒になって海について学ぶことから始めた。その中で、海や珊瑚の素晴らしさや環境を守るためのヒントに気づき、やっと実践に向けて動き出した。

##### ②児童生徒の変容の視点から

地域のゲストティーチャーに授業をしていただいたことで、子どもたちが地域での活動に興味をもち始めた。クリーン作戦やウォーキング大会に、子どもたち同士で誘い合って多数参加したり、ヨロンマラソンのボランティアの募集に進んで手を挙げたりと、休日の過ごし方が変わってきた子どもも多い。

##### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

地域で環境保全の活動をしながら、その活動を広く全国へ伝えていらっしゃる方とつながりがもてたことで、授業後も子どもたちの変化をこちらから伝えたり、更に新しい取り組みを子どもたちに紹介したりしている。できるだけゴミを出さない工夫、洗剤を使わない工夫等が、家庭だけでなく、地域にも伝わり、地域全体の意識が少しずつ高まっているのを感じる。

#### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

これまで2名のゲストティーチャーを招いて4時間の授業をしていただいた。これを受けて今度は、学んだことを自分たちで整理し、「こんなことをしていきたい」という発表をさせる予定である。ゲストティーチャーや保護者の方を招いて行うことで、子どもたちの実践への意欲を更に高めていきたい。

#### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

計画が定まっていなくても、「外に出る・話しかける・実行する」ことで地域や人とつながることから教師自身の学習が始まり、それが子どもたちへ波及していくことを知った。環境についての人材確保は進みつつある。しかし、「生き物を飼いたい。でもどうすれば？」という子どもたちの欲求に応えられなかったり、安全という大事な視点について対策が進まなかったりするのには、無知であるが故である。もっと外部に頼りながら、ネットワークを広げていきたい。

#### 8) 今後に向けた改善や展望

海洋教育の視点から考えられる教育活動を洗い出し、発達段階に応じて系統的に指導できるようにしたい。そのために、全学年の教科・領域を見直そうと思う。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	沖縄県糸満市立高嶺小学校
担当教職員名	赤嶺智郎

単元（活動）の テーマ	海人が活躍した糸満の海を知ろう
主な教科領域等	教科領域（生活科・国語・体育・総合的な学習）参加児童生徒（全学年 302名）
実践期間及び時数	平成29年 7月 1日 ～ 平成 29 年 1 月 31日（のべ60時間）
海洋教育の3つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットやHPを参照） ①環境 ②生命

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

リーフトレイル、スノーケリング、サバニを漕ぐ、そして糸満の魚を美味しく食べる等の実体験を通して、子供達の故郷である糸満の海やそこに住む生き物のことを実感を持って系統的に学ぶ。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

糸満は昔から海人の街と呼ばれ、「サバニ」と呼ばれるくり舟に乗り南洋各地へ出漁し、追込漁や漁行商に従事していた。しかし、近代化と共に海で生活する人々が減り、子ども達も海体験が少なくなり、海洋への関心や知識も低下してきている。そこで、本プロジェクトでは沖縄水産高校を主幹校として人的・技術的に連携し、小学生にリーフトレイル、スノーケリング、サバニを漕ぐ、魚を食べる等の学年に応じた実体験を系統的に行う。これらのプログラムを通して、先人が活躍してきた、自分達地域である糸満の海を多角的に知り、愛する心を育むことを目的とする。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

1, 2年生：リーフトレイル → 4年生：魚を美味しく食べよう

5年生：スノーケリング



糸満の海は生き物がいっぱい！



糸満の魚は美味しい！



自分の目でサンゴを

6年生：サバニ体験



糸満の海人はすごいな！

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

第1回の研修より「生き物の分類」の仕方と大切さを学び、本校2年生の「リーフトレイル」の後に、大度

海岸で捕まえた生き物を、形や足の数などで分類する授業を行い、2年生なりに、生き物の特徴を捉えながら、分類することができた。分類することで、生き物をよく見て、似ているところや相違点に気づき、対話的・主体的に学習に参加することができた。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

海や海洋生物の専門家と海の仕事を目指す身近な高校生とともに、主体的・体験的な海洋学習や、魚食の授業を行うことで、低学年は「海に親しむ」ことから始まり、中学年「海を知る」ことで海への関心を高め、高学年では、さらに海と人との共生のために「海を利用」し「海を守る」ことの大切さを学ぶことができた。

### ②児童生徒の変容の視点から

- ・海の生きものとふれあえたことで名前を覚え、自主的に図鑑で生きものを調べた子もいた。(1年)
- ・リーフトレイルでどの子も抵抗なく生きものに触れ、楽しく取り組めた。また、体験に感動し「糸満が好きだ」と言う子もいた。(2年)
- ・水産高校生徒の、自信を持って専門を追求する近い姿から、キャリア教育にも繋がった。(6年)
- ・リーフトレイルの後、国語の言語活動の一環として、クイズや生きもの図鑑をつくった。(2年)
- ・実際に触ったことのない魚に触れ、さらに食べることが子供の意欲をより高めた。授業後、家庭で実際に料理したり、魚に興味を持ち、積極的に買い物をする子が出てきた。(4年)
- ・普段は見られない海中を見て喜び、海の問題について考える児童もいた。スノーケリングが怖い児童が、練習を積み安全に実施した経験から「とても楽しく、もっと海の中が見たい」と言っていた(5年)
- ・実際にサバニに乗る体験はなかなかできないことなのでとても良かった。海での体験(釣り、リーフトレイル)も良く、糸満(海の地域)の良さや先人の凄さを感じる事ができた。(6年)

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・2年生のフィールドワークの後に2の2で「分類」の授業を通し、生き物の特徴に気づかせる活動を行った際、とても理科に興味を持ってくれたし、子供の発想に新たなよさも見つけられた。(理科)
- ・リーフトレイルの学習について知ることができ、磯の危険についても認識した。(1年)
- ・教師自身、初めての大度海岸を訪れ、生物の多様性や生態に気づくことができた。また、実施後、家族で出かけて、生きもの探しをした子がいた。(2年)
- ・糸満の伝統的な料理法を学ぶことができ、食中毒を防ぎながら美味しいという新たな発見があった(4年)
- ・スノーケリングでは、教師も不安があったが、子供達のレベルにあった学習過程で実施することでみんな海に潜れ、全員楽しそうな表情で、教員も含めいい経験となった。(5年)
- ・教師にとってもサバニのよさや地域、糸満の海人の歴史を学ぶことができた(6年)

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策(※他校や他団体に発信・普及したいこと)

- ・地元の海とそこで活躍してきた海人の歴史や素晴らしさを、その学年にあった実体験を多く取り入れながら、系統的に学べるようにしたこと。
- ・講師として、その道のプロ(第一人者)をお願いし、各体験を実施したことで「本物」に触れさせることができた。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・自然相手なので、天候に左右されるため、日程に予備をしっかりと位置づける。
- ・安全についてはやはり過ぎるほどの対処が必要であり、保護者や関係機関との連携が必要。

## 8) 今後に向けた改善や展望

- ・海に囲まれた沖縄であるが、学校で海を取り扱っているのは少なく、本校の取り組みである「スノーケリング」の海実習の様子がニュースで取り上げられると、多くの学校や教育機関から、取り組みについて反響があり、海洋教育プロジェクトへの問い合わせがあった(隣接する高嶺中学校は来年度応募)。



## 2. 中学校

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	北海道教育大学附属函館中学校
担当教職員名	郡司 直孝

単元（活動）のテーマ	輸送手段が多様化する現代における海上輸送の役割や可能性を追究する単元の開発
主な教科領域等	教科領域（ 社会科 ） 参加児童生徒（ 2 学年 109 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 7 月 1 日 ～ 平成 29 年 12 月 22 日（単元は8時間）
海洋教育の3つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

各教科では、海洋に関する事物を教材や追究すべき対象としている例が散見されるが、それらは個別・単独の取組に終始しており、学校の教育活動全体での計画的な海洋教育の取組は行われていない。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

海上輸送の特徴を既習事項や地域の状況などの視点から検討する単元の開発を通して、様々な輸送手段が発展していく中で、海上輸送の特徴を的確に把握し、今後の海上輸送の役割や可能性を追究できる生徒の育成をねらいとする。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール



4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

【研修プログラムの学びによって次年度の改善の主な方向性】

- ・第2回フォローアップ研修における三浦市立初声小学校の授業参観及び授業研究会、夏季集中講座での行徳鳥獣保護区及び第2回フォローアップ研修での矢作海岸でのフィールドワークから、単元を開発する際には、子ども自身が経験する機会を十分に含めて体験を根拠とする学習を展開したり、身近な（当然の「背景」となっている）地域素材に注目し活用したりすることが、大変効果的であること。
- ・夏季集中講座における教材作成と指導方法に関する講義・実習、ワークショップから、単元を開発する際には、他教科や領域との内容面及び資質・能力の「つながり」を明らかにすること。

5) 実践の成果

①海洋教育の改善の視点から

- ・研修において提供された海洋教育に関する講義や資料から、海上輸送の役割や可能性を生徒が追究する際、単に輸送手段としていかに「海を使う」のかという視点だけではなく、「海に親しむ」等の海洋に対する様々な視点を含めて検討することが重要であると考え、授業者として幅広い資料の提供や助言・指導等を心がけた。
- ・研修受講者として、自らが体験することによって理解や愛着が深まっていく経験を得たことによって、生徒自らが体験したり直接見聞きしたりする経験を重視する学習展開を心がけた。

## ②児童生徒の変容の視点から

- ・単元前にフェリー乗船等体験に参加した生徒は、フェリーの快適性や安全性確保のための取組について、自らの体験に基づいて理解したことによって、単元の授業における生徒同士での検討の場面では、自らの体験に基づいて役割や可能性を積極的に考案し、ともに検討する他者に伝える姿が見られた。
- ・大量に安価での輸送が可能となる海上輸送の特色や、世界の物資輸送での海上輸送の重要性を理解することができた。また、そうした特色等を踏まえた上で、航空輸送や陸上輸送との使い分けの在り方、とくに青函地域における海上輸送の在り方や可能性を具体的に検討し提案する姿が見られた。さらに、それらを検討する際には、資料集やインターネットなどを適切に活用して、自らに必要な情報を収集し選択する姿が見られた。

## ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・津軽海峡フェリーの全面的な協力によってフェリー乗船等体験でのブリッジ見学や特別授業を実施することができた。次年度以降も海洋輸送をテーマにした学習への支援を表明いただいております、今年度の実践成果を踏まえて、よりよい連携の在り方をともに検討していく予定である。
- ・担当者が所属する地域の教科研究サークルにおいて、本実践に関する実践交流を実施した。近隣地域でも海洋に関する実践は多く取り組まれていることから、海洋に着目した教材開発等の可能性が期待される。
- ・本実践の目的や内容等に関する新聞取材を複数受け、3紙で掲載された。保護者からは海洋を視点とする本実践への好意的な反応が見られた。継続的な実践と取組の積極的な発信によって、海洋教育に対する地域の関心を高めていきたい。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

- ・中学校社会科(地理的分野)では、交通に特化した学習内容がきわめて少ない。しかし、とくに海上輸送は、世界の物流や日本の産業の発展を支える要素である。また、国内や他国とのつながりを支える歴史的にもきわめて重要な要素である。本実践によって、主に「海を使う」という視点に立った海洋教育の実践が可能になるとともに、社会科として交通に関する学習を豊かなものにできると考えている。
- ・単元前に、希望生徒のよるフェリー乗船等の体験を実施し、実際に函館から青森へフェリーで移動する機会を設定した。このことにより、海上輸送の役割と可能性を検討する際に、自らの体験に基づいて考察したり、自らの体験を伝えながら他者とともに検討したりする姿が見られた。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・特別な地域で実施できる実践事例の一つとしてではなく、他地域でも実践することが可能な単元に本実践を再開発していくことが必要である。そのためには、単元の指導計画だけでなく、他教科との具体的な連携や本実践で活用した教材等を汎用性の高いものへと整備していく必要がある。
- ・海上輸送の役割や可能性を考察した際、効率性や公正さ、実現可能性などを十分に考慮していない案が見られた。この点を克服するためには、第3学年における「現代社会をとらえる見方や考え方」や企業、財政などの学習の際において、2学年で検討したものを再度検討することで、案をより精選していくことができるのではないかと考えている。

## 8) 今後に向けた改善や展望

- ・単元の指導計画等の改善について、今年度の実践を踏まえるとともに、他地域での実践可能性を高めたい。
- ・そのために、本実践を地域に発信するとともに、教科研究サークル等での実践交流を継続したい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	広島県呉市立豊浜中学校
担当教職員名	森木 美喜子

単元（活動）の テーマ	シーカヤック体験と藻塩づくり
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習 ）参加児童生徒（ 1・3 学年 34 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 7 月 1 日 ～平成 29 年 8 月 31 日（ 6 時間）
海洋教育の3つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

本校は瀬戸内海の中央部に位置する島にあり、周囲には穏やかな瀬戸内海の風光明媚な景色が広がる。保護者の中にも漁業関係者がおり、近くには広島商船高専という船舶職員育成を目的とした学校もある。そのため、以前は漁業や海運関係の仕事に進む者も多かったが、近年は少子化のため、そのような進路を目指す者は激減している。

海洋教育についても、そのような環境が身近にありすぎて、あえて意識されていないという現状である。また、以前はボート部など海に親しむ活動があったが、現在はそのような施設設備や環境も無くなっている。体験学習を通して海洋教育の機運を高めていきたい。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

隣の島にある、県民の浜にある施設を利用し「シーカヤック体験」と「藻塩づくり」を体験し、海洋レジャーと古代の塩づくりについて学ばせる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール



1・3年生が、午前と、午後のグループに分かれ、体験活動を行った。

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

「何のために」この活動を行うのか、教員がねらいを明確にしたうえで、外部機関との連携を図り、協力をお願いした。生徒も学習の意義を捉えることができた。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

カリキュラムマネジメントの点において、学習活動がスムーズに展開できるよう、他教科（理科，社会，家庭科）との連携を図った。

### ②児童生徒の変容の視点から

「藻塩づくり」・・・資料館で、地域や海の歴史を学習し、指導員からの説明後、作業の工程や内容を理解し、藻塩づくりを体験した。体験後、作った藻塩を、むすびにつけて食べた。生徒は、改めて自然の恩恵に感謝するとともに、海を利用して生きてきた先人たちの知恵について感動していた。

「シーカヤック体験」・・・自然のなかで遊び、感動する喜びを体感した。また、人と自然が共存する文化活動を創造することに思いを馳せたり、自然の力と活動に伴う危険性を理解したり、安全への意識を高めることができた。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

新学習指導要領における海洋教育の位置づけ、重要生について研修することができた。また、本校の取組に地域の方も賛同してくださり、学習活動にご協力くださった。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策（※他校や他団体に発信・普及したいこと）

専門家や地域の方をゲストティーチャーとして招聘し、実際に話を聞いたり、五感を通じた体験をしたりすることにより、生徒が海と自分たちの生活を関連させて考えることができた。また、海と関わる仕事をしておられる方との交流を通して、生徒が自らの生き方を考えるきっかけとすることができた。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

学習活動や単元としては、「海に親しむ」「海を知る」の段階にとどまっているため、次年度以降は、「海と人との共生」につながる学習活動や単元を開発・展開していく。（防災・減災学習）

## 8) 今後に向けた改善や展望

持続可能な社会の担い手を作るために、カリキュラム（教育課程，学習プログラムの編成・開発）において、教科と海洋に「つながり」をどう作っていくか，また，学習活動をどう繋いでいくかが鍵を握る。

教科と海洋教育の横断的なカリキュラムマップを作成すると同時に，単元や学習活動で，生徒に身に付けさせたい資質・能力を再度，学校で明確にし，整理していきたい。小学校や近隣中学校との連携も図り，発達段階に応じたカリキュラムの創造・編成について協議し，協働して行っていきたい。



### 3. 小中一貫校

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	千葉県市川市立塩浜学園
担当教職員名	荘司 愛

単元（活動）の テーマ	塩浜の生物と環境 ～嵐潮光る海原に～
主な教科領域等	教科領域（塩浜ふるさと防災科） 参加児童生徒（ 5 学年 24 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 6 月 16 日 ～ 平成 29 年 11 月 18 日（ 25 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

- 平成 27 年度 小中一貫校 塩浜学園開校にともない、塩浜ふるさと防災科（文科省教育課程特例）を実施
- 平成 28 年度 海洋教育パイオニアスクールプログラム 単元開発部門に参加（主に 5・6 年生で実施）
- 平成 29 年度 海洋教育パイオニアスクールプログラム 単元開発部門 継続（主に 5 年生で実施）

2) 単元（活動）の目的・ねらい

平成 28 年度より義務教育学校「市川市立塩浜学園」となり、9 年間の「学びと育ち」をつなぎ、「系統性・連続性」を重視した教育の具体的な姿として、「塩浜ふるさと防災科」の目標「ふるさと塩浜の歴史や自然環境に触れて理解を深めて（以下省略）を具現化するために、本年度も継続して海洋教育に取り組んでいる。

本単元においては、以下の 4 点を目標とする。

- ・塩浜や行徳の生物と環境について興味を持ち、意欲的に調べたり発表したりすることができる。
- ・塩浜の海に関する生物と環境の姿（特色）について理解することができる。
- ・疑問に思ったことから、調べたいテーマを決めて調べる計画を立てたり、まとめたりできる。
- ・わかりやすく伝えるために工夫したり、友達の意見に対して自分の考えを述べたりすることができる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

- つかむ カワウの大群が海に向かう映像を見て、感じたことを話し合う。  
実際に海に出て、分かったこと、感じたこと、疑問を出し合う。
- しらべる 調べたい内容が同じ人でグループを作り、テーマを決める  
調べるための方法を考えて、企画案を作り、発表する。
- まとめる 集めた情報をまとめ、発表準備、発表を聞く準備をする。  
各グループで発表をする。
- 活かす 自分たちで取り組みたいことを話し合い、実践する。  
学習を振り返り、次の単元以降につなげていく。



実際に、東京湾に出てみた

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

夏に本校の学区に隣接していて、実際の学習で赴く獣保護区においてフィールドワークをすることで、この地域に「海洋教育」の学習を進めての素材があることを実感した。そこでの資料や、学習の進め方をヒントに、調べ学習・発表活動などを深めていくことができた。本校では、学習対象の児童が 4 年～5 年となるため、生物と環境を学ぶ導入の部分にあたるので、より丁寧な素材提示が必要だと感じた。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

児童が調べたくなるような「意欲の喚起」に時間をかけた。船上学習を通して生まれた疑問やキーワードを整理していく過程を設けることで、児童が自ら課題を見つけ、意欲的に取り組めるようにした。また、企画を作成した段階で見せ合うことで、発表の質を高め、誰に伝えたいのかを考えることにつながるように工夫した。また、他教科と関連させることで、教科横断的な取り組みを行った。

国語：「しょうかいポスターをつくろう」「すいせんしよう」「言葉と事実」「意見文を書こう」  
「効果的に発表しよう」といった学習と並行して取り組んだ。

社会：「水産業のさかんな地域」「わたしたちの生活と環境」

家庭科：「かたづけよう身の回りの物」

### ②児童生徒の変容の視点から

- ・東京湾の良さに触れ、親しみを持つことができた。また、三番瀬の学習を通して、東京湾にすむ生物の環境が変化していることを知り、環境をよりよくしようとする態度が身についた。
- ・赤潮や青潮の発生のメカニズムを学び、日頃の生活排水を減らそうと取り組む姿がみられた。
- ・自分達の身近にある東京湾をきれいにしようとしている人いることに気づくことができた。
- ・様々な疑問や、それに関連する事柄をイメージマップにまとめ、自分が調べたり解決したりしたいテーマを決める能力が身についた。
- ・自分達のテーマについて調べたことを効果的に発表する能力を身につけることができた。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・調べた事を保護者にも伝えることで、家庭によっては家族で生活排水を減らす取り組みを行っていた。また、調べる過程で保護者が児童と一緒に関わったことで、関心を持つ保護者が増えた。
- ・船橋三番瀬環境市民センターの方に協力いただき、児童の疑問を解決する場を設けることができたのは、児童と地域の方とをつなぐ第一歩となった。
- ・研修をする教職員の業務等の都合により、別の者が代理で参加することが多くなった。実際に研修に参加させていただいたことで、海洋教育への理解がかなり深まった。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策（※他校や他団体に発信・普及したいこと）

児童がテーマを絞り、調べていくための方法を企画段階で一度発表する方法をとったが、これは、一つの挑戦的な試みであった。少人数での発表は、伝える側と聞く側が近く、さまざまな気づきを得ることにつながった。また、企画を発表する機会を作ることで、自分達のゴールを明確にする事ができた。



企画案発表に挑戦した

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・児童の関心・意欲を持たせるためには、体験的な活動を行う事が何よりも効果的である。
- ・児童のテーマによっては調査が難しいものもある。事前に教員も資料を用意できるように、リサーチしておかなければならない。文献やインターネットからだけでは調べきれない内容については、体験的な学習活動も取り入れていく必要がある。
- ・各グループのテーマがそれぞれ異なるため、どのようにしてまとめていくべきか。（単なる発表で終わらせない方法の検討が必要。）
- ・教科担任制を行っている事もあり、関連付けてできた教科とできなかった教科があるので、関係する教員との連携が必要。



「見える化」の工夫をした

## 8) 今後に向けた改善や展望

- ・身近にいる海洋教育に関する専門家や海に関わる人々を探し、地域のネットワークを広げていく。
- ・船橋三番瀬学習館が新しく開館した。この施設の活用も検討していく。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告資料

学校名（団体名）	佐賀県玄海町立玄海みらい学園
担当教職員名	峯 慶太

単元（活動）の テーマ	未来へつなげたい私たちの宝 ～棚田と海～
主な教科領域等	教科領域（総合・社会・理科・家庭） 参加児童生徒（第 5 学年 4 8 名）
実践期間及び時数	平成 2 9 年 5 月 1 日 ～ 平成 3 0 年 3 月 2 日（5 5 時間）
海洋教育の 3 つの 柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

- ・第 1・2 学年：「海や浜辺の生き物となかよし」 第 3 学年：「磯の生き物となかよし」
- ・第 4 学年：「地域の海や水産物のよさを未来につなげよう」 第 6 学年：「プロジェクト N（長崎）・G（玄海）・D（自分の夢） ～ふるさと・玄海町のよさを発信するとともに、自分の夢を思い描こう～」

2) 単元（活動）の目的・ねらい

- ・先人たちの時代から多くの恵みをもたらしてきた棚田と海について調べ、考えたことをまとめ、発信することで、ふるさとを誇りに思う気持ちを高める。
- ・ESD の視点を単元計画に盛り込み、「過去・現在・未来」という時間軸を中心に据えて課題設定や調べ活動を行うことで、ふるさとのよき環境を維持・発展させ、未来へとつなぐための行動を考えていく態度を育てる。



3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

第 1 次：稲作の暦についての学習，実習田（棚田）での田植え体験，稲の生育状況の観察，棚田周辺に生息する生物の観察，稲刈り・脱穀体験

第 2 次：調べ活動の課題設定（「過去・現在・未来」をキーワードとして分類），調べ活動（図書館，インターネットの活用，家族や地域の人材への取材などを通して），ゲストティーチャーによる講話①，グループごとのまとめ

第 3 次：九州産業大学における「学びの歩み」の発信

第 4 次：中間報告会における「学びの歩み」の発信，最終報告会へ向けての改善点の話し合い

第 5 次：最終報告会へ向けた準備，ゲストティーチャーによる講話②

第 6 次：稲わら編み体験（稲の有用性についての学習）

第 7 次：最終報告会へ向けたグループごとのまとめ

第 8 次：海洋教育九州フォーラムでの「学びの歩み」の発信（代表児童），最終報告会における「学びの歩み」の発信，お世話になった方々を招く「感謝の会」の実施，東京都多摩市立大松台小学校 5 年生との交流（WEB 交流），玄海みらい学園第 4 学年へ向けた「学びの歩み」の発信



4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

- ・「学びの航海図」，「海洋教育カレンダー」，「ストーリーマップ」の作成を各学年で作成した。
- 9 年間をつないだ学習内容の系統化を図るための第 1 歩が踏み出せた。

→「海洋教育」を柱に、生活・総合的な学習の時間と他教科の学習をつなぐことが可能になった。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

- ・体験活動をベースにして、地域（ふるさと）のよさや魅力を見聞の視点で評価し、そのよさや魅力を伝えるためにどんな資料が必要かを考えられるように学習活動を工夫した。
- ・地域（ふるさと）のよさや魅力を伝える際に、どんなことを伝えれば自分たちと同じことを感じてもらえるかを意識できるように学習活動を工夫した。

### ②児童生徒の変容の視点から

- ・地域（ふるさと）のよさや魅力に気づいたり捉え直したりして、そのよさや魅力を誰かに伝えたいと思えるようになった。
- ・調べ活動や取材などを通して、グループごとのまとめに必要な情報を収集した上で、それらを適切に取捨選択し、整理・分析を行えるようになった。
- ・整理・分析した内容を、相手意識をもって明瞭・的確にまとめ、相手に伝えたいことを伝える際の大切なことに気づき、それを生かして報告会で発信する姿が見られた。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・海洋教育を進めるにあたり学年を超えた活動も計画し、各学年の学びをつなげようとする意識が芽生える等、教職員職員の一体感が生まれた。
- ・探究活動や発信の段階で地域の方をゲストティーチャーとして招いたり、体験活動をする際、保護者に広く協力を呼びかけたりしたことで、学校と地域との距離が縮まり、連帯感が生まれた。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

- ・「学びの航海図」、「海洋教育カレンダー」、「ストーリーマップ」の作成が、生活科や総合的な学習の時間で取り組む海洋教育と他教科の学びとの関連をあらかじめ意識して、見通しをもって取り組むことにつながる。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・学習内容の系統化、精選を引き続き行うこと→学年間での内容の重なりを洗い出し、それらを整理することが必要。 ・「人材（人財）バンク」の必要性 ・海洋教育の評価規準・学びの視点の共有（教師間、教師・児童間） ・玄海みらい学園の「げん海学習」指導案形式の共通化

## 8) 今後に向けた改善や展望

今年度行なった教材開発や実践を振り返りながら、今年度作成した系統立てた学びの計画や学年ごとの細案を見直しまとめ、今年度の学びを紡いで発展させた学習活動が展開できる環境を整える。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	佐賀県玄海町立玄海みらい学園
担当教職員名	鶴丸 なつき

単元（活動）の テーマ	自分の目で見て 自分の耳で聞いて 自分の肌で感じる 防災・減災学習
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間・道徳 ）参加児童生徒（ 8 学年 75 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 5 月 1 日 ～ 平成 29 年 3 月 2 日（ 55 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

<7 年>：海の生き物調べ、生き物マップ作り、生き物カルタ（5 月） <9 年>：平和学習  
地引き網、地魚でバーベキュー（7 月）※1・2 年と交流 南の海の生き物  
海鳥観察（12 月） 総括

2) 単元（活動）の目的・ねらい

災害が身近に起こりうる可能性があることに気づき、学習や体験を通して災害への知識を深める。  
また、仲間と情報を共有することで新たな考えを生み出し、発信する力を育ませる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表や写真等を使用して分かりやすくしてもよい）

5 月：防災センター（バス研修） 6 月：熊本地震の学習②  
熊本地震の学習① 熊本地震の学習③～④「学生編」  
熊本城視察 参照：「あの場所はないけれど」

9 月：海の危険 10 月：東日本大震災の学習②～③  
九州北部豪雨の学習 参照：「釜石の奇跡」  
東日本大震災の学習① 上石美咲さんの講話  
「福島は今～学生として伝えたいこと～」  
TTT の講演会、ワークショップ  
「私たちの震災、みんなで変える防災」

11 月：防災・減災のまとめ①～⑪ 12 月：防災・減災のまとめ⑫～⑱  
クラス発表会、学年発表会



4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

夏休みの研修を経て、海の危険について取り組んだ（地形、危険生物など）。  
12 月の研修を経て、「防災・減災学習」について新しく得た情報を子どもたちに伝え、まとめ学習に取り組み  
せた。「事実と真実の違い」にも触れながら、学習をすすめた。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

昨年度は、教師側から発信した情報の中で学習していた。今年は、被災地を視察し、体験談から学ぶことで、被災者の心情に迫るだけでなく、自分のことと捉え防災意識を高めさせた。

### ②児童生徒の変容の視点から

被災地を訪れ現状を自分の目で確認したり、被災者から直接話を聞いたりすることは、子どもたちにとってインターネットや調べ学習で得るよりも心に響くものがあったようだ。他人事ではなく、自分のことと捉え学習する力、考える力が少しずつ備わってきたように感じる。活動の感想にも、防災・減災の必要さや防災意識についてコメントする子どもも増えてきた。また、避難場所や避難訓練について子ども達なりに再度考え直し、新たな考えを生み出そうとしている。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・海洋教育を進めるにあたり学年を超えた活動も計画し、各学年の学びをつなげようとする意識が芽生える等、教員職員の一体感が生まれた。
- ・探究活動や発信の段階で地域の方をゲストティーチャーとして招いたり、体験活動をする際、保護者に広く協力を呼びかけたりしたことで、学校と地域との距離が縮まり、連帯感が生まれた。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

被災地を実際に訪れ、被災された方から直接体験談を聞いた。子どもたちは同年代に興味をもつ傾向があり、講演して頂ける方や取り扱う教材をできるだけ子どもたちの年齢に近づけた。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

自分の目で、自分の耳で、自分の肌で感じるができる体験学習に強みを感じた。しかし、文章を書くことに課題がある子どもが多いため、自分の思いをうまく表現できない。自分たちなりの考えを生み出す力が少しずつ備わってきたが、発信する力はまだまだである。この課題を克服するために、教師側がどんな手立てをすべきなのか、また子どもたちにどんな取り組みをさせればいいのかと考えている。

## 8) 今後に向けた改善や展望

今年度行なった教材開発や実践を振り返りながら、今年度作成した系統立てた学びの計画や学年ごとの細案を見直しまとめ、今年度の学びを紡いで発展させた学習活動が展開できる環境を整える。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	鹿児島県南さつま市立坊津学園
担当教職員名	西村 太希

単元（活動）の テーマ	豊かな海を守り続ける児童生徒の育成
主な教科領域等	教科領域（ 坊津学 理科 ）参加児童生徒（ 1～9 学年 132 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 1 月 30 日 （1 年…3 時間 2 年…3 時間 3 年…20 時間 4 年…26 時間 5 年…15 時間 6 年…18 時間 7 年…15 時間 8 年…17 時間 9 年…12 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

義務教育学校の特徴を生かし、9 年間を通じた海洋教育の実践を通して、坊津の豊かな海を守り続ける児童生徒を育成する。また、各関係機関と協力することで、専門的な助言をいただき、深い学びの実現を目指している。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

坊津は海を利用した産業、観光に力を入れている。しかし、少子高齢化の中、産業の維持・発展、魅力発信者の減少などに課題がある。魅力的な海洋教育の実践を早期にとりくみ、9 年間の学びを系統的かつ発展的にとりくむことで、坊津の海を守り続ける児童生徒を育成する。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

1 年 海で遊ぼう（7 月）	5 年 育てる漁業（5 月～7 月）	8 年 イカ芝から考える生態系（4～5 月）
2 年 海で遊ぼう（7 月）	6 年 海の環境問題（11 月～1 月）	9 年 サンゴ養殖（6 月～3 月）
3 年 お魚検定（1～3 月）	7 年 坊津の塩と食（10 月～1 月）	
4 年 海と生きる坊津の人々（10～12 月）	ぶり大根ができるまで（6、7 月 1～3 月）	

写真 1  
エビ養殖場見学  
5 年



写真 2  
イカしば引き上げ  
8 年



写真 3  
サンゴの養殖  
9 年



4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

体験活動を基盤にした探求活動のプロセスを明確にした。そのため、各学年の単元ごとに、学習のプロセスと伸ばしたい資質能力を整理した。また、専門家と学校の協力体制の確立と、活動内容の棲み分けを明らかにすることで、どの教諭が担当しても、活動に取り組むことができるようにした。さらに、次学年への発表会を設定し、学習成果を「引き継ぐ」ことで、昨年度より発展的な学びになるよう意識した。

## 5) 実践の成果

### ① 海洋教育の改善の視点から

昨年度までは、海洋教育を実践する学年は限られていたが、本年度から全ての学年で海洋教育を実践した。そのことで、9年間を見通した単元計画を立てることができた。また、他教科とのつながりを意識するために、単元計画に、他教科の関連を記載したことで、教科横断的な指導の実践ができた。

### ② 児童生徒の変容の視点から

6年生はこれまで環境教育の一環として海の清掃活動を行い、海の美化を呼びかけるような取り組みを行っていた。今年度は、関係機関の方をお呼びし、実際に海がきれいになった実例を聞くことで、効果的な美化活動の在り方を考えながら取り組んだ。具体的には、ただ単に海の美化を呼びかけるポスターを作成するのではなく、ポスター設置後の変容を調べたり、漁師のごみに対する意識をインタビューしたりすることで、対策を考えた。最終的に、「人に対して呼びかける」ではなく、「今の自分が継続してできること」を実践し続ける児童を育てたい。



写真4 くすの木自然館職員による講話

### ③ 教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

8年生のイカしばに関する取組では、イカの卵を本校で観察している様子が地域新聞に掲載された。その後、鹿児島水産高等学校から授業協力への申し出があった。また、1年生が浜辺に落ちているイカの卵を見つけ保護者に説明したことがあった。目を輝かせて説明する児童の変容を見て、海洋教育の実践を期待するようになり、実際に保護者が、自ら授業協力を申し出ることもあった。



写真5 イカのふ

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

どの教諭がどの学年を担当することになっても、海洋教育を実践できるようにするため、関係専門機関に各学年の担当になってもらった。また、単元の最後に「引き継ぐ」ことで、下級生は上級生の思いを引き継ぎ、よりよい探究にしようと意欲を高めるように工夫した。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

イカは水槽による継続的な飼育が難しい。そこで、科学的な視点だけでなく、文化・芸術的な視点にたった活動を広げたい。例えば、イカ餌木の発祥は「薩摩餌木」であり、素材はギョボクから金まで歴史背景によって違いがあったことを調べたり、イカ漁業の発展をまとめたりする活動を実践したい。また、美術でイカえぎづくりを行うなど、教科の特質を踏まえた体験活動の充実も図りたい。

## 8) 今後に向けた改善や展望

単元の軸は坊津学であるが、各教科に必要な資質能力を、より引き出しながら探究活動に取り組む必要がある。例えば9年の「サンゴの養殖」をより深みのある実践にするために、小学生段階で高めておくべき各教科の資質能力や、単元内容のかかわりを整理し、ポートフォリオ等にすることで、積み上げていきたい。最終的には、9年次において、未知の内容に対して、主体的に探求、発見、発信等ができる児童生徒を育てたい。



## 4. 高等学校

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	宮城県気仙沼高等学校
担当教職員名	鈴木 悠生

単元（活動）のテーマ	これまで基礎的・基本的知識・技能を活かし、科学的探究活動を深化・発展させ、批判的・科学的思考力、プレゼンテーションをする力を中心としたコミュニケーション力の育成
主な教科領域等	教科領域（ 課題研究Ⅰ ）参加児童生徒（ 2 学年創造類型 34 名 ）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 7 日 ～ 平成 29 年 12 月 20 日（ 77 時間 ）
海洋教育の3つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

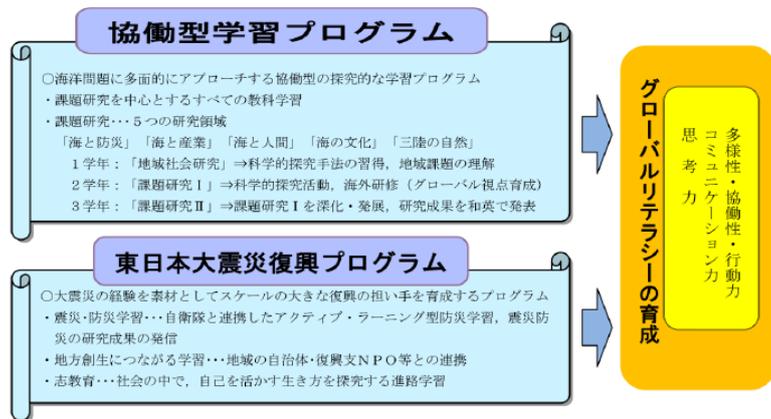
1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

平成 28 年度から S G H に指定され、研究テーマを「海を素材とするグローバルリテラシー育成～東日本大震災を乗り越える人材育成をめざして」とし、「海を活かす・海でつながる・海と生きる」をキーワードに学校設定科目「地域社会研究：1 学年全員」、「課題研究Ⅰ・Ⅱ：2・3 学年創造類型 1 クラス」を中心に課題研究活動に取り組むこととしている。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

グローバル社会において、未来創造に向かって行動するために必要な「グローバルリテラシー（思考力、コミュニケーション力、多様性・協働性・行動力）」を課題研究活動、アクティブ・ラーニング型の授業、防災教育、地方創生に関わる活動などを通じて、育成する。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール



年 月	学習内容	学習到達目標・学習活動
前期	ガイダンス	一年の流れを知る
	4 思考ツールを学ぶ	テーマ設定に向けて、マインドマップや論理的思考方法について学ぶ
	5 キーワード調べ	データやグラフの数字を疑う。観察・仮説・実験・考察の流れを体感する
中期	6 キーワード調べ	地域社会研究等を踏まえ、興味あるキーワードの現状や背景を調べる
	7 実験計画立案	RJ法や担当教員と話し合いながらテーマを絞り込む
	8 テーマ発表会に向けて	予備実験や調査したデータから仮説を立てることが出来る
後期	9 テーマ発表会	研究テーマを発表に向けてスライドを作成する
	10 研究発表	研究テーマについて意見交換する中で、自分の研究への適切なアプローチ方法について感じ取る
	11 研究発表	テーマ発表会でのアドバイス等をもとに調査方法を再考し、研究活動を進める
第一期末	12 研究発表準備	テーマ発表会でのアドバイス等をもとに調査方法を再考し、研究活動を進める
	1 研究発表	研究発表に向けて、研究を整理し、説明資料を作成する
	2 報告会①	研究発表に向けて、専門的なアドバイスをもらう
第二期末	3 報告会②	研究発表の結果や夏休みを経ての研究進捗状況をグループ内で報告する
	4 報告会③	これまでの研究を発表するポスターを作成し、文化祭で発表する
	5 報告会④	研究の再開。必要に応じて、外部指導者から指導を受ける
第三期末	6 報告会⑤	調査研究活動を進める
	7 報告会⑥	調査研究活動を進める
	8 報告会⑦	調査研究活動を進める
第四期末	9 報告会⑧	調査研究活動を進める
	10 報告会⑨	調査研究活動を進める
	11 報告会⑩	調査研究活動を進める

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

今回の研修 ⇒ 小中学校からのつながりを高校では意識する必要がある。

気仙沼市 ⇒ 気仙沼市全ての小中学校がユネスコスクールであり、本校の入学生のほとんどが E S D の経験者。海に関する学習を経験している生徒が多い。小中学校の取組を理解するとともに、高校での学びをどう発展させていくべきか・・・教員が「これまでの生徒の経験値」を共

通理解する+生徒が「高校生としての達成レベル」を意識する。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

研究において、比較する意識を持たせる ⇒ 地域を知り、他を知る

今年度は、クラスの生徒34名中17名を引率して台湾研修を行った。気仙沼同様、台湾でも海を身近な環境として生活している。訪問先の生徒達は自分が生活している地域の知識が豊富であった。グローバルな視野をもって研究を進めるために、はじめに自分の暮らしている地域を十分に理解し、地域間の違いを比較することである。その後のフィールドワーク、国際理解講座では、複数の条件・状況を比較する視点を重視している。



### ②児童生徒の変容の視点から

課題研究を行うことで、海と地域の関わりを学びながら、地域課題を解決したいという意識を持つ生徒が多くなった。気仙沼市のイベントや、大学や他の高校での研究発表会に参加している生徒も増えている。また、地域の課題を主体的に考えることで、他地域にも展開できるよう、内容を深められるようになってきた。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

11月、本校の職員研修に市内小中学校の先生方へも案内した。(5名の先生が参加)



## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

生徒自身が直接体感するフィールドワークなどを設定する機会を増やした。また、インタビュー取材や、アンケートを利用した街頭調査など、海の街で生活している人の考えを研究に取り入れるように促した。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

研究を行う中で学ぶ意欲をどう育てるかが課題だと認識している。課題研究は「地域を起点とするグローバル視野の養成」を目指しているが、学校の独自性とある程度の一般化の折り合いの付け方が難しい。

## 8) 今後に向けた改善や展望

校内の取り組みとして、学年を越えて上級生の経験を下級生に伝えるなど、縦のつながりを持つ機会を増やしたい。その中で知識を確認し、思考を共有・展開させ、学ぶ姿勢を示させていきたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名	宮城県多賀城高等学校
担当教員名	松浦 進一

単元（活動）のテーマ	津波襲来後の土壌窒素化合物の同化と変遷を調べる
主な教科領域等	教科領域（理科（化学・生物）） 参加児童生徒（1 学年 7 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 7 月 日 ～ 平成 30 年 3 月 日（約 30 時間）
海洋教育の 3 つの柱との関連	②生命 ③安全 ④その他（ 防災 ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

全国 2 例目の震災関連専門学科である災害科学科を設置し、その分野から発展させて各分野へ拡張して取り組んでいる。



2) 単元（活動）の目的・ねらい

東日本大震災時に発生した津波が通過した後、植生の回復を土壌成分から探り、簡易的な分析化学的手法を用いて定量的に調べる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

- 7 月 浦戸諸島フィールドワーク実習（土壌を採取）
- 8 月 分析実習
- 9～10 月 ポスター製作、追実験
- 11 月 県内生徒理科研究発表会
- 12 月 11 月の発表の反省を受けて、追実験計画作成
- 12 月 県内サイエンスフェスタにて発表（教育委員会主催）
- 2 月 全国海洋教育サミット
- 3 月 つくばサイエンスエッジにて発表
- 3 月 研究内容総括、後輩へ引き継ぎ



4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

- ・地域素材を活かした学びについては、共通のコンセプトで実施しているため、有効性を確認できた。
- ・より目標・目的を明確にして活動を行い、常に客観的に他者の意見や講評、批評をいただくことの重要性を再確認できたため、様々な専門家に積極的に依頼し、ご意見・ご助言をいただく。
- ・小学校、中学校の生徒にも活動内容を発信することで、高校生の自身の成長（活動に対する責任や情熱を育む）を促すことができると確信できた。
- ・海洋教育実践を支える諸活動を考案・取り入れを常に考えていく必要性を実感できた。

5) 実践の成果

①海洋教育の改善の視点から

- ・震災後の自然における回復経過を、植物に必要な元素量から定量的にアプローチすることを目標に課題研究を行っていた。海洋教育研修から、海洋教育各分野の中において、どのような立ち位置で研究を深めていくかを確



認できた。より体験・実物の観察をフィールドにおいて詳細に行うことで、生徒の意識喚起を果たすべきであると考えようになった。

- ・高校生であるところからも、徐々に生徒主体に切り替えて、自主的・自発的な海洋教育への活動へと昇華させようとしている最中である。課題研究の内容を深める縦の方向と、他分野・他校種との連携である横の方向を生徒たちに意識させ、目標を明示出来るように様々な海洋教育フィールドにおける先生方や大学・研究機関との連携を構築し深めていく重要性を確認できた。

### ②児童生徒の変容の視点から

- ・研究から発表に至る、通常の授業ではあまり体験しない一連の流れを、入学当時から行うことで研究するとは何か、学習するとは何か、人に伝えるにはどのようにすれば良いかなどを学ばせている。海洋に関わる事例から、震災からの植物の回復度合いを調査することで、津波浸水地域での物的な復興の礎となる自然の回復を自分たち自身の問題として理解することが出来た。生徒たち自身も、地道に調査するという態度が徐々に真摯なものへと変貌している。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・防災教育を実践している本校にとっては、どちらかというと思恵をもたらす海洋というよりは、災害をもたらす海洋という認識の方が、現場において強い傾向がある。しかしながら、浦戸諸島におけるフィールドワークをしたりする中で、本実践における自然の回復力を科学的に検証したり、様々なテーマを持って活動することで、いわゆる陽の部分と陰の部分のバランスが取れた海洋に対する認識を徐々に、教員集団やその活動を見守り、家庭での会話の中で保護者たちに育むことができていないかと考えている。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

- ・本校において海洋教育が本格化して、まだ2年ほどであるが、様々な先行研究、先行実践例を参考にしながら、専門機関等との連携を模索し、実践しながら試行錯誤を重ねているところである。とにかく自校の地域性や特色を活かしたフィールドにおいて、やってみることが重要であると考えている。教員のみならず、生徒と共に試行錯誤することで、ビルドアップしていく過程も理解し、どう頑張れば成果に結びつくかが体験的に蓄積されるため、将来、大学等でより高度な学びをする際の力となるはずである。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・得られた教訓：化学班として、分析化学的な手法を用いた植生へのアプローチを試みたが、既出の研究法が膨大にあり、研究機関と連携すれば様々な測定機器を使用し、より正確なデータを導き出せるが、生徒主体を外さないようにやることを心がけるあまり、中々研究が進まなくなってしまった。よって、教員が導く部分と、生徒の主体性に預ける部分のバランスを、到達目標（発表会・報告会への参加等）との距離感を見ながらしっかりとその場その場で、そのバランスに配慮することに関して気を抜かずに、アンテナを高くして海洋教育を進めていくことが重要であるとの教訓を得た。
- ・克服すべき課題や困難：一番の問題は、実践する生徒の確保が難しい点である。根本的には、単位化されていないことから、部活動や放課後の時間しか当てられず、不定期に活動する中で、内容的にも継続性が保持できずにいる。新入生に初期段階でより綿密に海洋教育に関する理念や学習内容を刷り込み、イニシャルトレーニングを構築して、実際の活動と強固に結びつける仕組みを形成するためにも、本プログラムにおいて学習した内容を応用し、少ない時間でも成果を上げられるように海洋教育の質を向上させていきたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	山形県立加茂水産高等学校
担当教職員名	佐藤 久哉

単元（活動）の テーマ	庄内の魚食文化
主な教科領域等	教科領域（水産「課題研究」）参加児童生徒（ 3 学年 2 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 13 日 ～ 平成 30 年 1 月 27 日（ 70 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

教科水産の「水産海洋基礎」・「海洋環境」・「漁業」・「栽培漁業」・「海洋生物」・「資源増殖」・「水産流通」・「マリンスポーツ」・各科類型の「総合実習」の中で取り組んでいる。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

「課題研究」の授業で、国内で唯一ユネスコ食文化創造都市に認定された庄内鶴岡の魚食文化について調査し、浜文化の伝承と魚食文化を通して庄内の魅力をさぐる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

- 1 書籍・インターネットによる調査
- 2 庄内浜文化伝道師協会会長インタビュー調査、事務局聞き取り（庄内の魚食文化）
- 3 「庄内の達人プロジェクト～港町加茂～」聞き書き研修参加及び地元住民（3人）聞き書き調査（浜文化の伝承・庄内の魚食文化・港町加茂の海洋教育）

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

海洋に関するテーマは、身近にたくさんあり、そのテーマを各教科に教材として取り入れて、生徒自らが調査・体験・感じて学んで行く事により、地元理解や郷土愛にもつながる。また、ポスターやプレゼン資料を作成し、発表することにより違った視点からの意見やアドバイスを得てなお一層深い学びにつながっていく。研修や研究授業を見学し、海洋をテーマにして生徒により深い学びをさせることができることを感じた。

5) 実践の成果

①海洋教育の改善の視点から

教科水産「水産海洋基礎」で海・漁業・魚食文化の単元で「課題研究」等で調査した「日本の海」「山形の海」「日本の漁業」「山形県の漁業」「日本の魚」「山形県の魚」を加え地元理解及び進路に結びつくように改善している。また、「漁業」の授業でも同様にさらに詳細に地元漁業を紹介し体験漁業を実施している。

②児童生徒の変容の視点から

近年、漁師希望や海上就職希望の生徒が少し増加傾向にある。1年生でいかに興味関心を抱かせるかがそ

の後の進路指導につながっていく。学力の低い生徒も多く、いかに授業に引き込むかが授業を成立できるかの分かれ目である。自分の船舶職員時代の話や地元の海・漁業・魚の話を通して授業に引き込んでいくことで生徒との距離が縮まり積極的な発言を引き出せるようになってきた。

また、漠然とした目標しか持っていない生徒がほとんどで、具体的な山形県・日本の現状を理解させることにより、資格を取得しないと地元漁船には乗れないなど、いまやるべきことを理解できるようになっていく。

このように目標を持てる生徒はよいが、2年生になっても変わらない生徒もあり、どのような学びが必要なのかまだまだ研究しないとイケないのが現状である。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

学校の保護者アンケートでは、高校生活は楽しそうに生き生きしている。入学させてよかった。目標を持って高校生活を送っている。という項目が高い評価を得ている。専門高校なので、2年生から実習が多くなり実習作業を通して人との係わりや社会人としての基本的なマナーを身につけさせ、協調性をもって協同作業ができる人間形成を行っている。その結果、確実に2年生・3年生と人間力は向上している。

特に、SPH 事業とも重なり、県外視察や、こどもサミット・海洋教育サミットでの発表を通して、以前に比べ格段に指導する教員側の指導力が向上してきている。地域や大学との連携も増え学校の活性化へつながっている。

### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

「庄内の魚食文化」では東京大学海洋アライアンス海洋教育促進センターの指導助言を受けている。また、その中の「浜文化の伝承・港町加茂」については東北公益文科大学の加茂「聞き書き」に参加し、地元の方3名にインタビューし聞き書きを行っている。自分たちのやりたい事をどのようにして行ったらよいか相談・助言を受けることで方向修正を行っている・

### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

課題研究という授業の中で行っているため、時間や予算の制約を受ける。今回は、SPH や海洋教育パイオニアスクール事業を活用し実施している。一番の課題は時間の確保である。

### 8) 今後に向けた改善や展望

本校では、まだ海洋教育に対する学校全体の理解が十分とは言えない。来年度からは協力体制が向上するように今回の研修で得た知識を若い先生方に伝達し、地域に発信できる体制を構築していきたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	東京都立八丈高等学校
担当教職員名	校長 千葉 勝吾

単元（活動）の テーマ	島しょにおける海洋教育の推進－海浜清掃から漂着物調査へ－
主な教科領域等	教科領域（ 学校設定科目「人間と社会」 ） 参加児童生徒（ 1 学年 4 5 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 31 日（ 8 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

島しょにある高校なので、生徒にとっては海洋はあまりに日常の存在であるので、環境、国際、文化といった視点から再認識できる取り組みを全校的に実施している。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

「人間と社会」は東京都指定の学校設定科目であり全都立高校で実施されており、人間の在り方や生き方について社会との関係の中で捉えることを目的にしている。また、体験的な活動や奉仕活動などをおこなうことを重視している。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

- ・ 実践内容 海浜への漂着物を収集し、種類別に分別し数量をカウントし世界規模でデータベース化している国際 NPO に登録する
- ・ 実践の流れ 事前学習として地球規模の海洋汚染の状況について学習した上で、実際にフィールドに出て現地での説明をおこなった上で、各班に分かれて漂着物の収集活動を行わせた後、種類別に分別をおこない記録用紙に記入した。これを実施日の翌日、教員がデータベースにアップする手続きをとった。
- ・ スケジュール 事前指導 1 時間、体験活動 4 時間、事後指導 1 時間で実施



4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

昨年の単元（活動）では、海浜清掃から漂着物調査へということだけが目標であり、そもそもの漂着物調査の意味や成果についてはほとんどふれずに、単なる清掃活動が分別や係数といった少しの手間で科学研究になるということを生徒に理解させて体験するといったところに留まっていた。

今年度、研修プログラムに参加することで、海洋汚染の状況や海洋環境の保全の重要性といったことを、八丈の地域に即した内容で理解させることが重要であることに気づき改善をおこなった。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

島しょ海洋教育は、海洋が身近過ぎて幼少期から小学校中学校までの段階で、海との触れ合いは終了で高校からは進学就職に島を出ていく準備期間であると漠然とした意識が形成されており、この意識の改善をおこなうことを教員に課題として与えることができた。

### ②児童生徒の変容の視点から

昨年からおこなっているこの単元（活動）により、1年生と2年生が漂着物調査をおこなっており、漂着物の継続的で世界的な調査が海洋環境を保全するには必要だということが理解できた。

さらに、以下のような新たな取り組みを自発的におこなうきっかけとなっている。

#### i 小笠原高校の生徒との合同海洋調査

11月に小笠原高校の生徒が八丈に来島した際に、1年生の生徒2名が小笠原の生徒と海洋調査をおこない交流を深めることができた。

#### ii ちびっこシェフの島じまんグルメ大会の実施

1, 2年生の生徒を中心に、魚貝などの島の食材を生かしたレシピ開発をおこなうコンテストを企画し12月に開催することができ、小学生チームが考案した「キンメバーガー」が最優秀賞となった。



#### iii 海浜清掃活動への継続的参加

島内の環境系 NPO 法人が毎月主催している海浜清掃活動に生徒が自主的に参加するようになった。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

教職員については、生徒たちははじめから島に住んでいて、幼いころから海洋に親しんでいるので、高校で何を今さらという雰囲気があったが、今回の研修を通じて高校であっても地域と連携して活動していくことの重要性を生徒の取り組みをみることで認識をあらためた。

保護者にも海洋教育よりも、学習時間を増やすことや受験対策をすすめてもらいたいという要望が強いが少なくとも海洋教育を学ぶことは学習効果を高める上でのマイナスにはならないことを理解いただき、活動への協力なども拡大した。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

他の地域や他の島しょで取り組まれていることを実地調査も含めて広く実施し、実践の参考することにより効果的に実施することができた。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

また、島内の小中学校や若者の人材育成をおこなっている団体（SHIP）と協力していくことが重要であり高校の窓口づくりなどが課題である。

## 8) 今後に向けた改善や展望

今後は小笠原やハワイとの連携を一層おこないながら、海洋教育をすすめていきたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

校名（団体名）	東京都立小笠原高等学校
担当教職員名	副校長 池田 厚

単元（活動）の テーマ	島しょにおける海洋教育を通じた地域創生人材の育成
主な教科領域等	教科領域（生物基礎、地理・歴史 特別活動：部活動）参加児童生徒（1～3 学年 44 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 6 月 1 日（木）～平成 30 年 2 月 28 日（水）（633 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（地域創生人材の育成）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

他地域との交流において、孤立した小笠原をはじめ東京都の島々で生きる生徒に、海洋島の自然環境を守る活動や海洋文化および海に親しむ産業について理解させた。島しょ高校生の横のつながりを創り、島（地域）の良さに気付かせ、課題の共有と改善策の協議を通して思考力・判断力・問題解決能力を培った。それらを通して海洋文化を踏まえ地域創生を担う人材の育成を図った。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

- ①島しょ高校生サミット：島しょ都立高校生の代表が集まり研修・情報交換を行いながら課題の共有、改善策の協議を通して生きる力を育む。また、生徒間の横のつながりを通して島しょに生きる自覚を持たせ、海洋文化を踏まえた地域創生を担う人材を育成する。
- ②小笠原の海洋文化・自然環境の学習：小笠原で長い間活躍されてきた方々を招いて、小笠原の海洋文化や海に関わる産業を学び、自分たちの住む島しょに誇りを持ち、地域創生を考えていく機会とする。また、兄島の自然保護活動に従事されている方々との活動を通して、他とは隔絶された海洋島の貴重な自然環境の価値や重要性を認識し、未来へと受け継ぐ担い手を育成する。
- ③海の安全教室：海に従事する海上保安庁の方から高校生が巻き込まれやすい海難事故について解説をいただき、より深く海を知り、海に親しむ。
- ④都立八丈高校との交流：小笠原と八丈の差異を比較しながら小笠原のアイデンティティを確立し、問題点や課題を発見してその解決策を検討する。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

(1) 「島しょ高校生サミットの開催（大島高校にて）」7月24日～25日

東京都の島しょ地区にある都立高校7校の代表生徒が一つの島（大島高校）に集まり研修・情報交換を行い、各島の良さや地域の取組、学校・生徒会の取組を知り、課題の共有と改善策の協議を通して、思考力・判断力・問題解決能力を養い島しょ高校生の横のつながりを作った。協議のテーマを「魅力ある学校づくり・島づくり」「海洋文化とその発信」とし、このサミットを通して生徒は自分の住む島の良さを再認識し、自分の住む島の課題とその解決に向けて関心を高め、島しょ高校生同士の横のつながりができた。



(2) 小笠原の海洋文化・自然環境の学習

① 「海洋教育講座 アウトリガーカヌーの歴史について」7月11日



小笠原で長年、アウトリガーカヌーを広められた方から、「モアナ」の話から始まり、都市と農村、小笠原の特徴、ホクレア号の挑戦、伝統航海法の技術などについて講義をいただき、島しょの自然に根差した自分たちの文化を掘り起こして誇りを持つためのメッセージをいただいた。



② 「兄島野外活動」11月10日～11日

海洋島の小笠原の自然を未来に引き継ぐために国や都、村が自然保護活動に尽力している兄島で、その活動を知り貢献する力を養った。環境省小笠原自然保護官事務所、林野庁小笠原諸島森林生態系保全センター、小笠原村役場環境課から6名に講師になってもらい、兄島の台地で小笠原

の生態系をまもつ活動について理解を深め、外来種の駆除を行った。

### ③ 「海洋教育講座 海と親しむ産業」 12月22日

多くの貴重な自然が残る小笠原で、長年にわたってダイビングや海洋観光等、海洋に触れ合う海洋産業に



従事されてきた方から、これまでの取組やこれからのビジョン、高校生に期待することについてお話を伺うことを通して、地域の海洋産業についての理解を深めるとともに、生徒が小笠原の地域創生を考えていく機会とする（予定）。

### (3) 「海の安全教室」 7月11日

海上保安庁の方々を招いて、小笠原における海難事故について解説をいただき、高校生が巻き込まれやすい事故について理解を深める。海を知り、海に親しむ導入として行った。

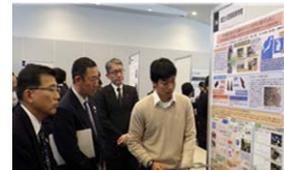


### (4) 「都立八丈高校との交流」 12月23日～26日（これから実施）

#### (5) 小笠原の将来を海洋教育の視点から考える活動と発信

① 他校との交流・連携の推進 島しょ7校との交流 都立八丈高校との交流

② ネットやポスターを利用した研究成果や情報発信



理数研究校としてのポスター発表（11月26日）、島しょ高校生サミット報告会（父島1月26日、母島は調整中）

③ 海洋環境の体験教育 自然保護研究会の活動、兄島野外活動

### 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

・島しょ高校生サミットや兄島野外活動の実践を通してその意義と魅力を、教育委員会、関係各官公庁、管理職、教員、保護者、地域、生徒、周りの機関に広げた。

・島しょ高校生サミットでは必ず地域の見学先を設定し、生徒に説明させる。

・協議・研修の振り返りの方法では全員参加・発表の機会を設け、緊張感のある研修形態とする。

### 5) 実践の成果

#### ①海洋教育の改善の視点から

海洋教育講座を2回設定。都立八丈高校から海洋教育のカリキュラムについて情報を得て、年間通し継続性のあるカリキュラムとした。

#### ②児童生徒の変容の視点から

初対面の生徒たちが打ち解け、お互いの島のことを知り、今まで気付かなかった自分たちの島の良さや課題の解決に向けて提案していく姿に、驚くとともに島しょ高校生サミットの目的が達成されたと実感した。「これまで島の問題や課題に関心を持っていたか」の質問への挙手が45%であったのが、「今回のサミットで、自分の住む島の問題や課題に関心を持つことができたか」の問いには全員が手を挙げ、生徒の意識が変容したことが分かった。

#### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

当番校の指定を受けることで教職員の意識が積極的になり、海洋教育の取組や1回目の成功は、地域や関係機関が大きな期待を寄せている。

### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

島しょ高校生サミットは複数校で実施することで智恵と支援の可能性が高まり、また当番制とすることで、事前の準備を含め生徒・教員の意識が高まる。主権者教育におけるアドバイザーの存在。地域の支援団体を作ること。

### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

・実際に現地に来ることで島しょ間でも大きな差異があることを認識できた。

・島しょ間のアクセスの不便さと膨大な費用や時間の必要性、天候に大きく左右される点である。

### 8) 今後に向けた改善や展望

宿泊防災訓練におけるハザードマップを利用した帰宅経路の作成や津波を想定した村民防災訓練ともからめていき、一つの年間を通したカリキュラムとして確立していく。島しょ高校生サミットは少人数の学校でも実施できるプログラムにしていく。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	神奈川県立海洋科学高等学校
担当教職員名	荻原 佑介

単元（活動）の テーマ	気候変動に関する海洋調査と生物調査
主な教科領域等	教科領域（資源増殖・海洋生物・海洋生物飼育）参加児童生徒（ 2,3 学年 60 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 15 日（ 20 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

本校は水産・海洋に関する専門高校なので、日頃から海洋教育の一環として環境教育を積極的に取り入れ、各授業において指導を行っている。（ビーチクリーン、命の教育など）

2) 単元（活動）の目的・ねらい

気 候変動に係る教育プログラムの構築することを目的としている。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

いであ株式会社、（国研）海洋研究開発機構、（国研）水産研究教育機構、笹川平和財団海洋政策研究所の専門家の支援や助言を頂きながら実習の計画と実施をした。実習の内容は、pH メーターを用いた pH、ウインクラー法を用いた溶存酸素量(DO)、デジタル塩分計を用いた塩分のそれぞれ計測を行った。調査地点は、淡水の影響が強いところ、アマモ場や藻場の生育しているところ、砂地の比較的安定した水域をそれぞれ選んだ。実施日は大潮の日を設定し、潮汐と日照による各数値の変化を確認した。その後、なぜそのような変化が起こるのかを専門家の解説を交えながら生徒自身が考察した。現在は 2 週間に 1 度の頻度で pH、DO、水温、塩分を計測し、長期的なデータの収集に努めている。



図 1. 専門家による調査の説明

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

研修前は、出来る限り精度の高い研究内容を考えていたが、現在は他の学校でも取り組みやすく、視覚的に理解のしやすい教材開発に着眼点を変えている。

5) 実践の成果

①海洋教育の改善の視点から

生徒の将来のことを考えつつ、海洋に関する興味を持たせるために、実際に水質調査を行い、専門家による実体験や経験などを聴講させた。その結果、授業（座学）では詳しく説明しない内容にも関心をもち、積極的に調べ、考える能力が付いたと思う。さらに、野外調査での安全管理のために教員の配置を工夫し、事

前に危険な箇所を予測して安全管理に取り組んでいる。

### ②児童生徒の変容の視点から

調査からデータの解析、結果、考察と一貫した教育が出来ているので科学的な視点での見方が養われたと思う。また、専門家、生徒同士など複数の人と話し合いの場を多く持つことが出来たので、自分の意見を表現、説明する能力が備わったと思う。さらに、専門家の方々が高校生にも分かりやすく説明してくれたので、生徒自身には関係ない話ではなく、より身近な事象として捉えられたのではないかと思う。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

水質調査から波及して、アマモ場や藻場の保全や造成が地元の漁業協同組合やNPO法人に改めて注目されるようになった。さらに、アマモ場の保全のためには食害生物の影響を無視することができず、その生物を有効活用した食品開発を行うことで磯焼けなどの知名度が向上した。よって、一般の方々に海洋環境を考えるきっかけを作ることに成功した。

### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策（※他校や他団体に発信・普及したいこと）

海洋酸性化や地球温暖化などの言葉は聞いたことがあるけれど、実際に経験したことのある生徒はほとんどいないので、pHを計測することでより身近に感じてもらえるように工夫をしている。

### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

野外調査が多いこと、化学分析に危険な薬品を使用することなどから、常に生徒の安全を確保しつつ最善の研究を行わなければならないと改めて感じた。そのために、最初は危険な作業を教員が行い、生徒が十分慣れたら全ての作業を行えるようにするなどの配慮が必要だと思った。データを収集することに重点を置くと教育的な側面が失われてしまうので、バランスを考えて計画を作成していきたいと思った。

### 8) 今後に向けた改善や展望

本年度はデータ不足で考察までうまく導くことが出来なかったため、来年度はさらなるデータの収集と科学的な視点で考えられる能力を養いたい。また、気候変動に係る教育プログラムの構築のためにより身近で親しみやすい教材を開発することを目指したい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	学校法人 大阪 YMCA
担当教職員名	内山 雅文

活動のテーマ	法人内、初等教育から高等教育での海洋教育の拡大展開及び系列法人の宿泊型海洋研修施設での海洋スポーツ領域以外での海洋教育活用
主な教科領域等	教科領域（ ）参加児童生徒（ 学年 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 31 日（ 時間）
海洋教育の 3 つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

- ①高等学校、専門学校での海洋教育の展開
- ②宿泊型海洋研修施設での海洋教育の展開
- ③幼・小・中・高校生を対象とした海洋キャンプの実施。

2) 活動の目的・ねらい

- ・ 自然生活を楽しみ、自然に適応する能力を身につける。
- ・ 良い習慣を育て実践する。
- ・ 健康のための知識を得て、自分の身体を守る方法を知る。
- ・ 生活を豊かにする技術を学び、想像力を育む。
- ・ 良き友人を作る方法を学び、互いの存在と生命を尊重する心を育む。
- ・ 民主的なグループ経験から、社会に関わる責任感を育む。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール （※図表や写真等を使用して分かりやすくしてもよい）

- ①高等学校 総合選択科目で通年実施、専門学校 外国人生徒を中心として夏季に集中海洋体験（2泊3日）
- ②通年での海洋プログラム提供
- ③夏季、春季に参加者を募集し、目的別・対象別に海洋キャンプを実施

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

- ①②③各実施責任者への研修で得られた情報提供とアドバイス。
- ① 2019年パイオニアスクールへの応募(高校)
- ②海洋教育促進拠点の検討(阿南国際海洋センター、堺市立日高少年自然の家)

5) 実践の成果

- ①海洋教育の改善の視点から
  - A) 夏季集中海洋体験(2泊3日)だけではなく、事前・事後のスクーリングを強化。
  - B) ②③海洋スポーツ中心のプログラムから、それ以外のプログラム開発に関心がでてきた。

②児童生徒の変容の視点から

- A) 海 = 海洋生物、海洋スポーツというとらえ方から、海が自分たちにとってもより幅の広いかわりがあることを認識した。
- B) 安全に対する意識付けの涵養。
- C) 縦割りグループでの協働生活を通して、民主的で互いの存在を尊重する姿

③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- A) 高等学校にて、海洋教育に関連する現行の総合選択3科目(海洋スポーツ、フィッシング、海洋体験)の見直しや新しい科目の検討。
- B) 行政や教育委員会、地元の高専や大学、漁業協同組合等との連携に向けた動きだしがみられるようになってきた。
- C) 海洋キャンプをSDG'sとの関連性に意識付けをしたプログラムを行うようになった。

6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

- ①校種の違う法人内への情報・実践報告の提供。
- ②海外からのインターンを多く迎え入れ、多様性の大切さを実感する。
- ③海洋教育関連施設情報の取得により(GODAC 国際海洋環境情報センター等)、新しい体験プログラムの展開が可能となった。

7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ①校種別の海洋教育担当教員の養成と研修。
- ②海洋スポーツ以外の専門知識の習得。
- ③アドバイザースタッフの獲得。

8) 今後に向けた改善や展望

校種別の海洋教育担当教員の養成、アドバイザースタッフの配置をするなどの推進体制構築により、海洋教育の拡大及び深化の実践に繋げることを強化する。また、自前の青少年海洋研修施設及び寄付によって取得した無人島を、海洋教育に関心の低い(ロケーション的にも恵まれない)学校団体を始めとする方々への、海洋教育の実践の場とプログラムの提供を展開し、より幅広い持続的発展的な海洋教育を実践する施設への転換を図ってゆきたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	長崎県立壱岐高等学校
担当教職員名	川富 典子

単元（活動）の テーマ	海洋生物観察実習
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）参加児童生徒（ 第2 学年 70 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 7 月 26 日 ～ 平成 29 年 7 月 28 日（約 20 時間）
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

海洋生物を題材として、生徒自らが課題を設定し、観察、スケッチ、解剖等を通して、その生態を推測する。また、実習や漁業体験などの体験的活動、地元漁師や大学教授等の専門家からの講義を通して、海洋と人間とのあり方について考える。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

- ①海洋生物の生態を推測する中で、課題解決を図る方法を学び、課題解決能力を育成する。また、自然科学への興味・関心を喚起し、科学的なもの見方・考え方を養う。
- ②実習での成果発表を通して、表現力やコミュニケーション能力を養う。
- ③体験的活動を通して、生徒の海洋生物や海洋環境に対する興味関心を喚起し、海を大切し、保全に寄与する心を身につける。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

- 事前①(7/5)：魚の体の構造や生息域などを文献等で調べさせ、予備知識を得させた。
- 事前②(7/11)：予備知識をもとに生徒に仮説を立てさせ、観察部位や測定項目を検討させた。
- 本実習(7/26)AM：体験(定置網引き上げ)、漁協見学、講義(水産業の現状)、体験(魚の捌き方)  
PM：講義(解剖実習に関わる事前指導)
- (7/27)AM：解剖(観察、スケッチ、測定)、骨格標本作製 PM：測定結果分析、考察
- (7/28)AM：考察、ポスター作成 PM：発表(ポスターセッション形式)
- 事後(9,10月)：代表生徒 4 名が全班のデータを集約し、再考察を行った。論文を日本学生科学賞等へ出品。

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

今年度の実践が、研修受講前だったため、次年度の活動にむけての改善点として、文系生徒へも「海を活かす」「海に親しむ」という視点で地域活性化と関連させた海洋教育を行い、海の有用性を理解し、活かすことができる人材、地元の将来を担う人材を育てていく。

5) 実践の成果

①海洋教育の改善の視点から

今年度の実習が研修プログラムを受講する前に終了していたため、次年度にむけての課題、改善策を示す。

**課題**：2年生生理系生徒のみが参加するプログラムであった。

海洋生物の生態を推測することが主目的となっており、地元の海の豊かさや持続性について考える機会が不十分であった。

**改善策**：文系生徒への海洋教育の実践と学年全体での実習成果の共有。（文系は、地元の事業所や市役所、商工会等と連携し、講義や調査等を通して、海に囲まれている故の島の課題、解決策、海を活かした地域活性化策を提案する活動を行う。）

## ②児童生徒の変容の視点から

実際に解剖を行い、各班のテーマに基づき、構造の特徴を観察し、胃の内容物の分析を行うことで、科学的思考力を育むことができた。さらに、事前学習で身につけた知識と得られたデータを結び付けて考察を行うなど、主体的に学びを深めることができた。発表に向けての準備では、生徒は質問に対して的確に答えようと、講師の先生方（地元の漁師や大学の教授）に積極的に相談をしたり、班での話し合いを重ねたりする姿が多く見られた。全員がポスターセッション形式での発表、質疑応答を行うことで、個々の表現力やコミュニケーション能力の向上とともに、一層の知識の深化を感じることができた。



## ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・地元の箱崎漁協組合や壱岐振興局水産業普及指導センターに、魚の提供や包丁等の貸し出し、講師としての協力など多大な支援をいただいた。
- ・活動に参加した理科以外の教科の教員が、実習の中での生徒の成長を見て、実体験による理解の深まりを実感していた。
- ・活動の成果を小中学生に示す場を設定するなどして、地元の子どもたちがより早い段階で海を知り、考えるきっかけとなるよう、今後、市の教育委員会等との連携が必要ではないかという意見が出た。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

- ・地元漁協の協力（定置網体験や魚の提供、捌き方等の指導）
- ・大学との連携（長崎大学水産学部より講師を招き、技術指導と専門的な知見からアドバイスをもらう。）



## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・本校の活動は、そのほとんどの運営を理科教員が行っている。次年度以降、学年全体で取り組む活動に発展させるために、他教科の理解と協力が必要不可欠である。
- ・魚の食性を推測するという探究活動にとどまっていたため、海と積極的に関わる人材を育てていくためには、地元の海の豊かさやその活用、持続性など、多面的に海を捉える活動に発展させることが必要である。

## 8) 今後に向けた改善や展望

- ・様々な側面から「海」について考える視点を育むために、文理に関わらず学年全体で活動の成果を共有する場を設ける。
- ・本校独自の活動に終わらず、市教育委員会等と連携し、小中学校教員にその成果を還元することで、島が一体となって、地元の海の保全に関わる人材、地元の将来を担う人材の育成にあたる。



## 5. 中高一貫校

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	神奈川県逗子開成中学校・高等学校
担当教職員名	風間 啓一

単元（活動）の テーマ	海洋人間学：海洋における今日的課題への取り組み
主な教科領域等	教科領域（総合学習、技術家庭、保健体育）参加児童生徒（中学 1 年～高校 2 年 870 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 8 日 ～ 平成 30 年 3 月 20 日（時間）
海洋教育の 3 つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

ヨットの製作及び帆走実習や 1500m 遠泳などの海洋実習活動、海洋の専門家による「海洋学特別講義」、有志生徒による今日的課題に取り組む自主ゼミ

2) 単元（活動）の目的・ねらい

生徒自身が課題の重要性を認識するために先端的な学問に触れさせる。課題の解明に向けて探求的学びを促すことで海に積極的に関わる人材を育てる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
中学1年							ヨット実習	海洋学特別講義	ヨット製作			海洋学特別講義
中学2年	ヨット実習						ヨット実習	海洋学特別講義				
中学3年			海洋学特別講義	遠泳			ヨット実習	文化祭展示	(有志)遠泳研究			
有志					東京大学訪問・自主ゼミ研究発表			「ヨットのテクノロジー」参加		自主ゼミ発表		海洋人間学講座

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

- ・ 中学ヨット部員に対して、ヨットの技術だけでなく海洋教育に関するグループワークなどを取り入れた。ヨットに乗れない時に筋力トレーニングだけでなく座学も取り入れるきっかけになった。
- ・ 指導案は 1 人で考えるのではなく、核となるチーム→学校→地域→全国と広げていく。情報交換と連携が重要だと学ぶことが出来た。
- ・ 物事につながりを探すようになった。海洋教育は教科横断するのに適したものだ気付いた。何でも海洋教育につながられないかと考えるようになった。
- ・ 「生徒が楽しんで学ぶにはどうすれば良いか？何が身に付くだろうか。」と考える時間が増えた。

5) 実践の成果

①海洋教育の改善の視点から

全国の先生とのネットワークを広げ、多角的な情報を得るようにしたい。海の無い地域での海洋教育のコンテンツにも興味があり、本校が神奈川県私学の情報発信元になれるように海洋教育を発展させたい。研修

が、本校の主だった海洋教育プログラムの終了後に実施されたため、次年度以降の海洋教育に反映させていきたい。

## ②児童生徒の変容の視点から

ヨット実習を通じて海への畏敬の念を持つきっかけになった。遠泳では仲間と共に達成する喜びと、自然をある程度制御する体験が出来た。将来困難に直面したときに、遠泳の成功体験に立ち返り、困難を打開する気概を身に付けられたと自負します。遠泳の事前事後アンケートを元に、生徒たちが実習を分析し、新たな気付きを得た。次年度の遠泳実習だけでなく中学1年生のプール授業にも活かせる可能性が見出せた。

## ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

次年度以降、他校との連携や地域への情報発信を積極的に展開していきたい。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策（※他校や他団体に発信・普及したいこと）

遠泳における達成のプロセス及び安全対策。泳ぎが苦手な生徒児童こそ受けてほしい授業である。顔も水につけられない生徒が、小さな達成を積み上げて行くことで1500m完泳する姿は単純に感動する。また事故防止のための教員研修や、ライフセーバーなどの外部団体との連携なども紹介したい。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

- ・ 本校で実施している既存の海洋教育からのさらなる発展が必要である。
- ・ 組織の体系を見直すべきである。教員の海洋教育に関する認知度の低さの改善が急務と考える。また教員間の熱意の差を埋めることも必要である。
- ・ 実践している海洋教育が、学内で完結してしまう傾向の打開が必要である。外部への発信や地域への還元という概念が薄かった。

## 8) 今後に向けた改善や展望

- ・ 研修で知り合った先生方との連携、意見交換を密に取っていきたい。他校への視察、研修にも積極的に参加していく。
- ・ (7)の課題を克服すべく組織を刷新する。組織の中で意見を交換し、より良いカリキュラムの構築を目指したい。楽しみながら指導案研究が出来る土台作り、そして教員の研修を行い啓蒙活動にも力を入れる。30年以上続いている伝統を下地に、新たな試みに挑戦する。失敗を恐れずに実践を積み重ねていく。
- ・ 特に実習活動における漠然としている教育効果の明確化と言語化。
- ・ 在校生の保護者への情報発信の強化→地域住民への情報発信 と展開していきたい。
- ・ 小学校、中学校、高等学校、大学という発達段階に応じた海洋教育を探求する気持ちを教員も持ち続ける。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	梅村学園三重中学校・高等学校
担当教職員名	石井 智也

単元（活動）の テーマ	地元の松名瀬干潟を知ってもらうために
主な教科領域等	教科領域（理科・社会・保健体育・道徳・総合学習）参加児童生徒（1 学年 137 名，科学技術部員，生徒会）
実践期間及び時数	平成 28 年 4 月 1 日 ～ 平成 29 年 3 月 31 日（ 時間）
海洋教育の 3 つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

(ア) 中学 1 年生「海の調査」，(イ)科学技術部の活動，(ウ)生徒会活動

2) 単元（活動）の目的・ねらい

(ア) 身近な生物の観察を行い，いろいろな生物が様々な場所で生活していることを見出すとともに，観察器具の操作，観察記録の仕方などを身につけ，生物の調べ方の基礎を習得する。

(イ) 自分たちで調査・研究・環境教育活動を企画・運営する機会を与え，リーダーを養成する。

(ウ) より多くの生徒の海に触れる機会を増やす。自治活動を通して生徒がより主体的に取り組めるようにする。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

(ア) 事前学習：干潟を学ぶにあたっての基本知識・安全管理，実習の目的，集団訓練(当日の動きの確認)。

(イ) 実習当日：クラスごとに 4 つの講座『潮干帯の生物観察』（三重大学生物資源学研究科海洋生態学研究室 木村妙子准教授・木村昭一研究員），『干潟の生物同士の繋がり』（三重県農林水産部みどり共生推進課 野生物班樋口大輔様・山下明久様），『伊勢湾沿岸の漁業の現状と移り変わり』（松阪漁業協同組合 大橋純郎組合長），『干潟は海のゆりかご』（ざっこ Club 佐藤達也代表）を体験，その後生徒全員で干潟の清掃活動を実施した。

(ウ) 事後学習：実習で学んだことをまとめクラスで発表。一部の生徒を選抜して学園祭でも発表を行った。

(エ) 月に 1 回 3 種の干潟(潟湖干潟・前浜干潟・河口干潟)の生物相の調査を実施。さらにその中で見つかった疑問に対し，さらに調査を生徒自身で計画し，実施し，データをまとめ，学内外で多数発表を行った。

(オ) 5 月 20 日，10 月 28 日：AQUA SOCIAL FES!! in 松名瀬を三重大学と共に主催・環境学習の講師。6 月 17 日：西黒部小学校の土曜授業の講師。8 月 6 日みえこどもの城主催「サイエンスフェスタ」に出展。9 月 30 日：日本地理学会高校生ポスターセッション。11 月 11～12 日：全国アマモサミット 2017 in 伊勢志摩。12 月 10 日：三重環境フェア 2017 への出展。12 月 16 日：冬のエコフェア 2017 で発表。

(カ) AQUA SOCIAL FES!! in 松名瀬への生徒参加の呼びかけ，当日の参加者の管理を行った。町屋海岸清掃活動への参加。科学技術部と協力して干潟の清掃活動・環境教育活動(クリーンアップ松名瀬)を実施予定。

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

事前・事後学習をさらに充実させる。海洋教育に関わる教員を増やす(特に若手教員にまずは体験してもらう)。

異校種間での交流・異なる地域との交流:3 月に科学技術部が室戸青少年自然の家でアクティビティを体験予定。

来年度は三重県立水産高等学校・奈良教育大学付属中学校と連携し、調査・地域カンファレンスを実施予定。

近くに海がない環境での海洋教育を考える：科学技術部の主なフィールドは干潟であるが、森についての活動も活発に行っている。また、今年度は森と海をつなぐ川にも注目し、「揖斐川 ESD ツアー」に参加し、「流域」という繋がりで森・川・海を見る視点を得た。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

(ア) 事前学習を充実させ、複数の教科で海洋教育行う(事前指導を理科だけで行うのではなく、社会で松名瀬干潟の地理・歴史を学ぶ、体育で集団行動の練習を行うなど)。

(イ) 海に行かずに海を体験することができるように、みえ環境フェア 2017 に出展する企画を工夫した。室内に干潟の砂・生物を持ち込み松名瀬干潟を再現し、子どもたちが干潟に直に触れるコーナーをつくった。

### ②児童生徒の変容の視点から

(ア) 地元の自然・生き物に触れることで、地元の良さを体感することができた。また、体験することで、生徒自身が実習を通して知ったこと・わかったことを他者に伝えたいと思うようになった。科目横断的に学ぶことで、学ぶこと自体の意味や学ぶことの有用性を生徒が体感することができた。

(イ) 科学的思考力・課題を見つける力・コミュニケーション能力が強化された。課題に対して地道に取り組む体力がついた。地元の大切さを感じ、地元のよさについて多くの人に知ってもらいたいと思うようになった。生徒の声：「やってみようという気持ちが大きくなった。」「目的から考えて企画をするようになった。」

(ウ) 地元の環境を意識する生徒が増えた。企画者・運営者となることで更に主体的に取り組むことができた。

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

(ア) 科学技術部員が環境学習の講師を勤めたり、地元の小学生に対して教育活動を行ったりすることで、地元の人に地元の干潟について知ってもらおう(あるいは再発見してもらおう)ことができた。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策 (※他校や他団体に発信・普及したいこと)

① 自然科学の研究者・漁業者・行政・地元の方々・水産高校の先生・自然観察のボランティアといった異なる立場の方々から、学ぶ機会を設けることで、様々な視点で干潟について学ぶことができた。

② 月 1 回の定期調査から生徒自身が新たな課題を見つけ、計画から実施・データまとめ・考察・発表までをすべて生徒が行う。小学校の土曜授業や環境フェアへの出展等も企画段階から生徒同士が議論を重ねて、生徒自身の手で作りに上げる。教員側は「待つ」姿勢を貫き、生徒ができることはすべて生徒が行う。

③ まずは生徒会役員に海浜活動に参加させ、参加の前後での自分自身の変容に気づかせた。自分たちと同じ体験をより多くの生徒に体験させたいと思うようになり、次は企画・運営者として活動に関わらせた。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

生徒たちにとって「直接体験すること」がいかに強いかを実感した。その体験を単なる体験に終わらせてしまわないための事前・事後指導をより充実させたい。海洋教育に関わる教員を増やすこと、さらに海洋教育を実践する教員を増やすことが課題であるが、そのためにも教員自身の体験の機会を増やすことが重要である。

## 8) 今後に向けた改善や展望

私自身は「海洋」分野の非専門家であり、それでも生徒の引率経験を活かして自らの体験を増やし、それをもとに実践を行っている。この経験を活かして、非専門家だからこそできる海洋教育という切り口で、海洋教育を実践する仲間を増やしていきたい。特に、若手の教員で新たに単元や活動を創り出せる人を育てともに活動していきたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告資料

学校名（団体名）	福岡県明治学園中学高等学校
担当教職員名	鹿野 敬文

単元のテーマ	『北極海に関する集中講座』プログラム作成
主な教科領域等	教科領域（学校設定科目：国際政治・国際経済） 参加児童生徒（高校 2 年生の 6 名）
実践期間及び時数	作成期間：平成 29 年 7 月 1 日～平成 30 年 2 月 28 日（実施期間：平成 30 年 3 月の 4 時間）
海洋教育との関連	①環境 ②生命 ③安全 ④その他（北極海域）

### 活動報告

#### 1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

地球温暖化により北極海航路の可能性が現実味を帯びてきました。そこで、極地研究所が中心となり、このことに関する調査研究が大規模に行なわれています。最近は、日本の気象に及ぼす北極海域の影響の強さも注目されるようになってきました。こういったことから分かるように、日本の青少年に「北極海域への興味・関心」を持たせることは、日本の将来を考えた場合、是非とも必要なことだと思えます。

そこで本校は今年度も、昨年度に引き続き「北極海域の興味・関心を喚起するプログラム」の開発・試行・検証・改善に挑戦することになっています。

#### 2) 単元（活動）の目的・ねらい

過去 3 年間（平成 27 年度～平成 29 年度）ずっと学んできた生徒だけで、早朝海洋講座（特に、北極海域が中心）を終わらせるのは勿体ないと考え、現高校 2 年生向けに『北極海に関する集中講座』（50 分×4 回）を平成 30 年 3 月に実施することにしました。そのための特別プログラム作りを目指します。

#### 3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

（今回対象とするのは平成 29 年度の③『北極海に関する集中講義』）

平成 27 年度（高校 1 年対象）	平成 28 年度（高校 2 年対象）	平成 29 年度（高校 3 年対象）
『国際海洋研究』	海洋教育パイオニアスクール	海洋教育パイオニアスクール
①早朝講座（海洋全般） ②フィールド・ワーク	①早朝講座『北極海域研究』 （1）放送大学の授業 （2）英文冊子の輪読 ②現場訪問とシンポジウム参加	①早朝講座（整理） （1）『北極海域研究』について （2）『国際海洋研究』について ②現場訪問とシンポジウム参加
海洋教育カリキュラム開発 プロジェクト	左の『太平洋島嶼国の研究』は、 SGH の課題研究として、継続 実施	③『北極海に関する集中講義』 （これのみ高校 2 年対象）
『太平洋島嶼国の研究』		

#### 4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

見学した三浦市立初声小学校の「水族館作り」は、とても面白い取り組みだと感心しました。その上、実物を前に「ウニの餌」や「ウニの寿命」について考えさせたりするなど、子どもたちに興味・関心を持たせる工夫が随所に見られました。ただ、中学生では「ウニの棘を全て取ると、どんな形が現れてくるのか？（答：ウニの殻は小さな正五角形の集合体）」「生物はなぜ正五角形を好むのか？」（←数学との合教科型学習）、高校生では「ウニの受精卵は、どれくらいの加重重力までなら卵割を始められるのか？」「ウニの受精卵は、無

重力下でも卵割をするのか？」(←物理・生物との合教科型学習) というふうに、同じ生き物を使って質問のレベルを(小・中・高で) 徐々に高めていく工夫があるとなおいいのではないかと、思いました。

この学びを踏まえ、『北極海に関する集中講座』プログラム用に作成する質問集を小・中にも発信し、先生方の協力を得て小・中・高で段階的に使えるオモシロ質問集作りに取り組みたいと思うようになりました。

## 5) 実践の成果

三浦市が作った教育プログラム(マグロを獲って加工し、販売するまでの一連の過程を伝える興味深い教育実践)のことを生徒に伝えたところ、マイクロプラスチックで同じようなことをしたいという生徒が出てきました。と言うのも、北極海域はとても寒く、分解速度が更に遅いため、マイクロプラスチックは大変な環境汚染問題になり得るからです。

その一方、今回の教員研修で知った「研究者から直に話しを聞く面白さ、意義深さ」を生徒に伝えたところ、自分で東京海洋大学(海洋科学部)や北海道大学(水産学部)の先生のところへ、直接話を聞きに行く者まで出てきました。つまり、学校内だけで学習を完結させない生徒がポツポツと出始めてきたのです。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

今回の教員研修では、特にフィールド・ワークが勉強になりました。ただ、北極へ生徒を連れて行くのはとても難しい(金銭面と安全面など)ので、代わりに興味深い写真を多く掲載している地球科学の本(英語版)を利用することにしました。

殆どの高校生は、選択科目「地学」を取っていないため、そこに書かれている内容に強い関心を示しました。その上、それを英語で読むとなると、更に効果がありました。と言うのも、生徒はそれまで自然科学の内容を英語で読むという経験がなかったので、とても新鮮に思えたのでしょう。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

海洋教育に熱心な先生が転勤したりすると、それまでの貴重な蓄積がその学校から一気になくなる可能性があります。小・中の場合は学校の組織作りで、先生の移動があっても大丈夫なようにすることができるかもしれませんが、教科担当制を取っている高校の場合はなかなか難しいものがあります。残念ですが、今回行った北極研究もきっとそうなると思います。

そこで、一つの提案なのですが、「海洋教育パイオニア・スクール・プログラム」に加えて「海洋教育パイオニア・ティーチャー・プログラム」を作って頂けないでしょうか。と言うのも、人脈は学校よりも個々の先生に出来やすいからです。ご検討頂ければ幸いです。

## 8) 今後に向けた改善や展望

三浦市の熱心な取り組みを知って、小・中・高の連携の大切さに改めて気づかされました。私はこれまでずっと高校生と向き合ってきたため、「海洋教育は高校3年間で完結させなければならない。」との強い思い込みがありました。それで、色々なことを短期間でカバーしようとし、いつもバタバタと忙しいことになっていました。

三浦市のように、感性豊かな幼い時期に海に関する直接体験を様々、そして沢山していれば、高校へ入学する頃にはかなりの問題意識が育っているため、高校側からするととても有り難い事前学習になります。勿論、その教育効果を高めるには、小・中と高校との間で情報共有・意見交換(例えば、local テーマと global テーマの分担に関する話し合いなど)の場を作ることが必要でしょう。幸い、私の勤める学校には小学校と中学校が併設されていますので、今後は是非そのようにしたいと思いました。



## 6. その他機関

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」活動報告  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	福島県只見町教育委員会
担当教職員名	伊藤 知雄

単元（活動）の テーマ	海洋教育の視点を付加した ESD（只見小学校）
主な教科領域等	教科領域（特別活動 生活科 総合的な学習の時間） 参加児童生徒（ 1～6 学年 55 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 4 月 6 日 ～ 平成 30 年 3 月 22 日
海洋教育の 3 つの柱 との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

只見町には小学校 3 校、中学校 1 校があり、全校がユネスコスクールに認定されている。そのうち只見小学校が海洋教育パイオニアスクールとして海洋教育に取り組んでいる。主な活動としては、学校行事として、「田子倉湖散策」「八十里を越えて海へ」「ふるさと登山」等を実施している。また、生活科・総合的な学習の時間では、「只見学」として、海と只見町の自然・文化との関連を調べる時間を設定し、探究活動を行っている。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

自然豊かな只見の四季について調べたり、体験したりすることを通して、内陸の只見と海とのつながりに気付かせる。また、八十里越トンネルの開通により、日本海や新潟県の都市との距離が近くなることによって、只見町にどのような影響があるのか、それぞれの学年に応じて考えさせる。

3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

	只見学（生活科・総合的な学習の時間）	学校行事
1 年	「只見の自然を感じよう」	田子倉湖散策 八十里を越えて海へ 要害山登山 学習発表会 雪像づくり 雪まつり
2 年	「只見の人や自然を感じよう」	
3 年	「只見の森の四季」	田子倉湖散策 八十里を越えて海へ 蒲生岳登山 学習発表会 半分成人式 郷土を開く
4 年	「八十里越を通してやってきた歴史や文化」	
5 年	「世界に認められた只見の雪食地形・動植物・ブナ」	田子倉湖散策 八十里を越えてから海へ 浅草岳登山 学習発表会
6 年	「只見町の将来を提案する～海とつながり、世界と結びつく～」	

4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

研修内容の各学校への伝達は十分に行っていないため、研修プログラムの学びが各学校の実践に活かされているとは言えない。今後、海洋教育を進めるにあたっては、「環境」「生命」「安全」の 3 つの柱に基づく計画が必要であること。活動の前にはあらゆる事故を想定し、十分な安全対策を講じる必要があること等を各学校に伝え、実践に活かせるようにしたい。また、教科と海洋教育を関連付けたカリキュラム作成や『海の哲学対話』等は、海洋教育のみならず教科の学習にも役立つものであり、各学校での実践を促したい。

5) 実践の成果

①海洋教育の改善の視点から

海での活動の前に田子倉湖を小型ボートで散策した。そこで日本海からもたらされる雪と田子倉湖の水や

山々の雪食地形との関係を実感させた。その後、新潟県寺泊海水浴場へ全校生で出かけた。途中、現在工事中の八十里越トンネルを特別に見学し、近い将来海との距離が近くなることを実感させた。寺泊では、地引網体験を行い、日本海の水産資源について体験を通して知ることができるようにした。2学期には「ふるさと登山」を実施し、只見町を俯瞰したり、それぞれの山頂から地形を確認したり、日本海に思いを馳せたりさせた。生活科・総合的な学習の時間では、「只見学」として、只見の自然・文化について課題を設けて探求し、只見と海との関係を具体的に捉えさせた。

#### ②児童生徒の変容の視点から

只見小学校における生活科や総合的な学習の時間での「只見学」においては、只見の自然や文化の特色について、自ら課題を見付け、調べ学習を行った。「田子倉湖散策」「八十里を越えて海へ」「ふるさと登山」等では、日本海からもたらされる雪の影響、食・水産資源としての命、只見の地形等への理解を深め、学年に応じて只見と海との関連を考えることができた。これらの活動を通して、探究活動に主体的、協同的に取り組み、より良い学び方や考え方ができるようになった。只見の自然のすばらしさや厳しさについて、多くの児童が認識を新たにすることができた。

#### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

只見小学校の実践は児童のみならず、教職員、保護者の海への関心を高めることができた。特に「八十里を越えて海へ」は、次年度は多くの保護者が参加を希望しているとのことである。また、他の小学校も次年度は同じ活動を実施したい意向を示し、波及効果は大変大きい。トンネル工事現場の見学の交渉は町役場に依頼した。当日も役場職員が同行した。「田子倉湖散策」「ふるさと登山」では地域の方々に献身的な協力をしていただいた。活動を通して、保護者、地域、行政機関の学校への理解が深まり、連携を強めることができた。

#### 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

只見町は海に面していないながらも只見川によって日本海と結び付けられている。浅草岳の頂上からは新潟平野を臨むことができる。また、町内の山に登ると、一本の筋になった只見川の流れを眺めることができる。山、川、海が関連し合って天候、地形がつくられていることが体感できる自然環境である。只見小学校では、このような環境を十分に活かし、只見と海との関係を捉えさせる学習内容を設定した。それぞれの活動は、事前に安全対策を入念に検討し、事故発生時の救急体制を万全にした上で実施した。このような事前準備は他校にも参考にさせたい内容であり、教育委員会としても共有化を図るべきであると考えている。

#### 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

只見小学校では活動にあたって、安全対策を十分に行い、どの活動も無事に終了させることができた。改めて、安全対策の重要性を学ぶことができた。次年度は他校も海での活動を行う予定である。また3校合同の宿泊学習を新潟県立自然の家で実施することになっている。これらの活動を意義あるものとするため、教育委員会としても学校間で安全対策について共通理解を図ったり、活動にあたっての要望等を聞いたりする場に積極的に関わっていかなければならない。また、学校教育だけでなく、社会教育としての海洋教育の在り方について検討し、より多くの人が海への興味・関心を高めるようにすることも教育委員会として考えていかなければならない。

#### 8) 今後に向けた改善や展望

次年度は只見小学校以外の小学校も海に出かける。事故の備えを万全にすることや緊急時に備えた役割分担等を明確にすることについて、只見小学校の実践を参考にさせたい。平成35年に予定されている八十里越トンネルの開通後、日本海が近くなることを考えると、只見町における海洋教育がさらに広がり、充実するようにしなければならない。そのためには、体験活動の充実だけでなく、教科と海洋教育との関連を明らかにしたカリキュラムデザインを教育委員会としても提唱していく必要がある。また、ユネスコスクールである只見町の小・中学校はESDを実践し、成果を挙げている。その成果を基盤とし、只見小学校の実践の共有化を図りながら、海洋教育が発展していくための方策を教育委員会として考えなければならない。これらのことを踏まえて小・中学校と連携を図り、今後町内の児童・生徒が、海への興味・関心をさらに高めることができるようにしたい。

平成 29 年度「海洋教育 教員研修プログラム」  
平成 30 年 2 月 3 日（土） 研修報告会資料

学校名（団体名）	独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立室戸青少年自然の家
担当教職員名	企画指導専門職 松下泰山

単元（活動）の テーマ	「波遊び」プログラムの開発
主な教科領域等	教科参加児童生徒（領域（生活科・総合的な学習の時間）1・2・3 学年 36 名）
実践期間及び時数	平成 29 年 9 月 5 日 ～ 平成 29 年 9 月 13 日（5 時間：事前 1、実施 1、事後 2）
海洋教育の 3 つの柱との関連	※該当するものに丸をつけてください。複数可。（※センターのパンフレットや HP を参照） ①環境 ②生命 ③安全 ④その他（ ）

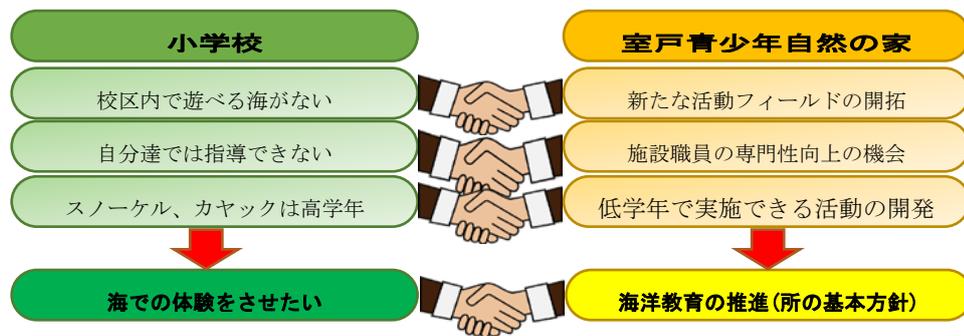
活動報告

1) 学校（団体）全体における海洋教育の取り組みの概略

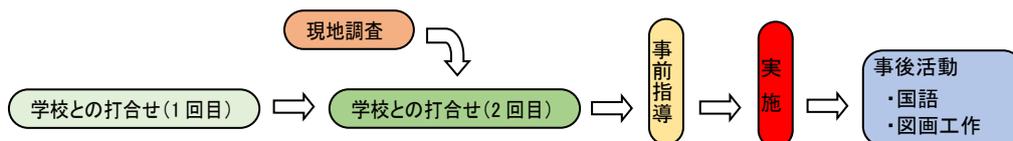
国立室戸青少年自然の家は自然体験活動の場を提供する青少年教育施設である。当所を利用する団体に対し、各種の海洋アクティビティを職員指導のもと実施している。平成 28 年度より「海の学び・生涯学習プロジェクト」の採択を受け、海洋教育に取り組んでいる。

2) 単元（活動）の目的・ねらい

これまで活用していなかった海浜区域を活動フィールドとして再設定し、子供が五感を活用して全力で波と遊ぶ活動を新規に提供する。子供の興味・関心に応じて無限大に広がる活動の中で、適切に活動できる装備を整え、安全管理体制を構築し、低年齢期の子供が安心・安全のもとに波遊びを楽しめる体制をつくりアクティビティとして継続提供できるようにする。



3) 実践内容・実践の流れ・スケジュール



4) 研修プログラムの学びの中から実践に活かしたことや研修を受けての活動の変更・改善点

研修プログラムのなかで、様々な先生方との交流の機会を得たことで学校、先生の立場からの問題意識を認識することができた。これを受けて、実施に当たっては「学校の思い」を十分にくみ取る、という視点を重視した。特に、実施までの事前学習を念入りに行ったことが改善点となった。また、本研修を通じて、体験のあ

アウトプットの大切さを理解した。実践でもアウトプットの機会を設けていただき、事後活動の時間を組み入れていただくことができた。

## 5) 実践の成果

### ①海洋教育の改善の視点から

これまで、「親しむ」「利用する」ことを中心にアクティビティを組み立てていたが、「環境」（波の物理）、「安全」（楽しく活動するためのルール）を付加して活動を実施した。

### ②児童生徒の変容の視点から

普段は「近づいてはいけない」「遊んではいけない」と指導されている場所で活動できることから、児童はすぐにでも動き出したい様子であった。注意事項を確認した後は、「バディを守る」ことへの声掛けのみを基本として、児童の自主性に任せた活動となった。初めは寄せる波と追いかけてあつたり、ゆっくりと足先をつけるだけであったが、全身に海水を浴びてからは積極的に海に挑んでいく姿が見られた。夢中になって50m近く沖へ泳ぎ出す児童が複数いたが、振り返って陸地を見た時に、自分が長い距離を泳いでいたことに驚いていたとともに、泳ぎに対する自信を持ったようである。



高知新聞 2017年10月1日付

### ③教職員や保護者の変容や地域との連携の視点から

- ・ 私たち施設職員側からの情報発信よりも、プログラムを受けた学校側からの PR 効果が絶大であった。実施を知った市内他校より、次年度実施の要望を頂くことができた。
- ・ 実施校が「遊んではいけない場所」としている場所を安全管理面に十分配慮して今回の活動フィールドとしたが、教員からは、「こんな楽しいことが、この場所でできるとは思ってもみなかった。」との声を頂いた。

## 6) 本実践で特に工夫した点、特筆すべき内容や方策

入念に学校との打合せを行い、ニーズを的確に捉えたことが、スムーズな実践へとつながった。特に安全管理面の配慮は十分に行う必要がある。小さな疑問でも、的確な対処法を示すことで活動に対する不安を取り除くことができる。

## 7) 実践から得られた教訓や克服すべき課題や困難

単発の活動提供をどのように体系化していくか、については今後も検討が必要な課題である。また、気象海象に左右される自然体験と、過密する学校スケジュールとのすり合わせが難しく、予備日設定が困難な状況である。

## 8) 今後に向けた改善や展望

すでに他校からも次年度の実施要望があり、今回実践した内容をもとに、新たなフィールドを開拓して実施する方向である。私たち施設職員もハコ（施設）の中での活動だけではなく、「体験の出前」を積極的におこなう体制を整えることができたことから、活動を拡充させていきたいと考えている。

東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター  
日本財団  
笹川平和財団海洋政策研究所  
共催事業  
「平成 29 年度 海洋教育 教員研修プログラム」成果報告書

2018（平成 30）年 2 月発行